

昭和四十一年一月一日発行
 発行所
 名古屋市中区東門前町5/2
 井上重兵衛方 電(321) 1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 有限会社 安井印刷所 電(541) 4881

狂言人語

初春の明るく澄める大空に

白く天馬の天馳くる見ゆ

一陽来福の新春を迎え先づは初春のお慶びを申し上げますと共に今年も不相当狂言の御鑑賞を心からお願ひ申し上げます。

一月の催能

一月六日 学生能 午前九時半始

能 竹生島 森 五百子 西村 欽也

狂 蚊相撲 吉田 耕蔵 伊奈俊美(名大) 服部交司

狂 蝸牛 森 富太郎 伊藤至昭(南山) 長谷川元(南山)

謹賀新年 狂言共同社

昭和四十一年元旦

昨年末狂言界元老善竹弥五郎先生の訃報に接し心から哀悼の意を表します。今年には又若々しい新進の台頭に期待して心から伸びゆく斯界に希望を感じたものです。

一月十五日京都の茂山千五郎氏の千作襲名披露公演があり、同時に七五三氏が千五郎を襲名され斯界に活躍されるのは心強い限りであり之を今年の飛躍の第一歩として今年の活躍に大きな期待をかけましょう。

能	夜討留我	鈴木 智代
能	一月九日 春星会	佐藤 友彦
能	一月十五日 清韻会	午前十時始
能	羽衣	伊勢 信雄 西村 欽也
能	通小町	大谷 一三 高安 滋郎
能	融	長屋 潤 西村 弘敬
狂	餅酒	井上礼之助 佐藤卯三郎
能	一月二十三日	宝生定式能
能	弱法師	宝生 九郎 高安 滋郎
能	野守	佐藤卯三郎 西村 欽也
能	内藤 秀雄	西村 欽也

狂 鷄 井上義次 井上礼之助

狂言解説

蚊相撲||新参者を抱えんとした大名、冠者を使いに行ったが連れて来た男は何と江州守山に住む蚊の精。さあ大名と蚊との奇妙な相撲が始ります。蝸牛||主命でかたつむりを取りに行つた冠者、こともあろうに山伏を間違えて囃子物で浮いてやって来る。いかにも狂言の大らかさを持つ曲です。

餅酒||年貢を納めに都へ登る加賀、越前兩國のお百姓が道で逢い、同道する色々と上頭から出された問題にも無事答えて目出度く帰って行きます。

鷄||鷄入りの作法を知らぬ鷄、悪戯者に教えられた通り、鷄の真似をし、驚いた唄これに鷄に負けじと鷄の真似をするので……。

う ま

西村 弘 敬

昭和四十一年の千支(えと)はうまの年であります、近年このえとが色々な事に使われる様になりました、年賀はがきを初めとして、「カレンダー」置物彫刻、其の外色々趣向をこらして用いられます。謡の方にも馬とか駒とかの文字の出てる曲も中々に沢山あります。然し馬だけを扱った謡は無い様に思われます。

彼の絵馬(えま)といふ謡は馬の毛の色、即ち黒馬と白馬とで年の雨の多少を占(うらなふ)との事を作られて

あります。少しく変わったものでは、項羽といふ曲があります。項羽は支那の楚(そ)の国王であつて、漢の高祖と天下を争ひ、七十余度も会戦して遂に敗北して、烏江の原で戦死した人です。其の項羽が常に騎乗して居た馬を望雲驢(ぼううんすい)といつて一日に千里を駆ける名馬であつたが、主人公項羽の敗退といふ運命を知つてか、膝を折り伏して動こうとせなんだ。項羽は仕方なく馬より降り立ち「ちから山を抜き気は世を覆ふ。時に利あらず驢行かず」大きに歎きの詩を賦し、剣を抜き自ら首を掻き落して、遂に烏江の野辺の霧と消へた。望雲驢も膝を折り、黄なる涙を流しけりと謡つてある。

狂言空見

野村 広 二

あけましておめでとうございます。新年に当り、昭和四十一年の能楽界が多幸でありますよう、みなさまと、祈りたいとおもいます。

昨四十年も、能楽の世界は、まことに多事でした。その三・四をあげてみますと、なによりも、「老女物の年」といえます。『檜垣』『娘捨』『鶯鷄小町』『卒都婆小町』と、実に数多く演ぜられました。もちろん、どの上演も、祝賀、追善の会で、愛好者を東奔西走させたことは申すまでもありません。

次は、能と狂言の海外公演でした。イエーツ生誕百年、ハーバート、リ

下卿の来日、「世阿弥」(山崎正和作)のニューヨーク公演は、別に書くとして、ギリシヤの円形劇場の演能の盛會をカラー写真でみたときは、日本へはるばる渡り給うたミロのヴィーナスに、そば近くよって、まみえたとおなじような感銘が、身のうちの中を走りすぎました。狂言の方も、強い共感を得たようです。狂言方につづく喜多節世君の滞米も、橋岡久馬君の仏留學とともに、その教習は、やがて熟して、大きな実りが期待されることでしよう。「日本能楽會」の再結成も特筆に値します。

さて、芸術祭賞には「松垣」(シテは観世鉄之丞)が選ばれました。これは楽しい話題にひきかえ、十二月に、二人の大先輩がなくなつたのは、悲しい報道でした。色々の思い出の去來に時のたつのを忘れました。三宅襄(のぼる)氏の逝去と善竹(せんちく)弥五郎翁の他界です。三宅氏は、能楽協會の世話をながくしておられ、「昭和の能」と苦楽を共にされた方です。批評家としても一流。論敵はあつたでしょうし、他の方々が、能、狂言のほかの日本芸能にも、筆をとられました。が、同氏は、真実、能ひと筋に生き抜かれました。「能」に毎号、毎号お書になった一曲、一曲の解説は、大記録です。「卒都婆小町」「道成寺」ほか、どれもみな珠玉の篇々です。あるとき「批評は厳正でなくちやいけぬよ」といわれたことが、いまでも忘れられません。眼鏡ごしの鋭い目差し、少しとがった口元にただようやさしさ

と、しかも、あの丸刈りの頭をちよつとうしろへそらせての、氏独特のカタチであつたことはいまでもありませぬ。「能」へ駄文をのせさせていただいては、随分と困らせたことと恐縮しております。金剛能楽堂、奈良、大阪朝日能の出会い、終生の思い出といえます。弥五郎翁は、狂言の大長老、能の六平太翁の存在とおなじといえましよう。名古屋では、三九年の「楽阿弥」(らくあみ)の小舞がお別れになつたようです。楽屋では本場に礼儀正しいご老人でした。過ぎし三一年の夏、病状お見舞の返事をおいただきしたのを、手文庫から、早速とりだしました。き帳面な字です。先代忠三郎氏が小舞「通門」を舞うあと、「三人片輪」のシテを勤める楽しさにつづいて「同曲は普通の舞は鶴の段ですが、当日は替ノ型で、景清をまいます。父忠三郎(先々代)に叱られ、叱られけい古した小舞で、父をしのび舞わしていただきます」しかじかとある。十月二八日の共同社追善會のことです。当地では故井上新三郎氏と共演、また故歌村彦四郎氏とは格別じつこんでした。自然なくらい地味で、あたたかく、明るく、楽しい芸風で、あの目差しは「福の神」をおもわせ、「末広」の笑いの声は、木末をわたって、空高くひびいていきました。「道」としての狂言でした。実は申し添えたい一事があります。「楽阿弥」のとき、尺八に用いられた青竹を、請うていただいていたことが、図らずも翁の形見となつたことです。お二人のご冥福をお祈りします。

明るい四十年の話題にもどりましょう。名古屋では、田鍋惣太郎氏の歎五等叙勲。あらためておめでとを申し上げたい。それから、演能の回数もはなばなしのほどでした。狂言では、まづ、河村丘造氏の古芸が、しみじみとした味をみせてくれました。青年たちの活躍も、ひとときわ目立ちましたが、井上祐一君は、その筆頭でしょう。「釣狐」が昨年秋井上礼之助、本年秋季、野村又三郎氏と二回ありましたのも大きな話題。朝日狂言會、名古屋和泉會、やるまい會のうち一番充実していたのは、山本兄弟と高井則安の三氏参加の朝日狂言會でした。和泉會は期待にこたえてくれず、空疎な感が尾をひき、やるまい會も、もう一つふんい氣に冗漫さの影がさしていた。しかし、「鉢叩」(和)の構成と、「萩大名」(や)の運びはおもしろく、またみごとであつた。なお、昨年は、狂言方の青年たちとおなじく、ハヤシ方の青年諸君にも、その精進のあとに、贅辭をおくりたい。お願いしたいのは、もつと、「は氣」と「氣迫」をもつていただきたいことです。西村欽也君は格別の進境です。能の方では、「鶴」(ぬえ・内藤泰二)一番をあげたい。昨年も、好演の能は、「鸚鵡小町」(シテは大西信久)をはじめ二〇番に余るが、数の上では金剛殿氏です。「定家」「西行桜」「鉄之丞」「源太夫」(本田秀男)「殺生石・女体」(豊嶋弥左エ門)「西行桜」(九郎)「邯鄲」(後藤得三)「景清」(喜多実)「忠度」(金春信高)「野宮」(英雄)「山姥・白頭」(長杖)「猶

賀正

ふじや

河文

電話代表 一三八一 番

トヨダビル店

大名古屋ビル店

とてな

船津屋

電話名代表 一八八〇 番

趣向で「型付け本」はこれをそのまま伝承しているのだが「波形本」では「一人召使う下人が身に暇をも乞わず何方へやら参ってござる」という例の不奉公物への統一が見られるのである。これはやはり弟子家である早川幸八家が次第に早川家の芸風というものを作り上げ、そこにはじめて狂言台本「波形本」という伝本を書写する必要が生まれて来たと言えるのではなからうか。

枚数の関係上とても多くは触れ得ないが以上著しい特徴を少し挙げて見た。本書には全く奥書が見られず時代は明らかではない。とても江戸期の書写とは思えぬほど保存状態は良いが、これは、「雲形本」が書写されてからは殆ど顧みられず、また永く封印のまゝ質入れされていたことなどからである。書中「二本柱」の後の部分に「楽殿ニテ、文政十二年丑四月八日、和泉相勤メル」とありその時の柱の大きさを記しているが、これは後の書き込みと思われる。前述の如く「波型本」より古いとは思われぬが、それでも江戸中期から末期にかけて完備された後期台本への一つの過渡期の狂言を示している貴重な書であると云えよう。大藏流「虎寛本」(寛政年間書写)同時代ではなからうかと推察し得る。今後詳しく研究する余知ある貴重な書と云えよう。(佐藤 友彦)

和泉会温習会

十二月十八日、和泉保之師主催の和泉会会員による第二回狂言小舞小謡温習会が、日本福祉大学図書館「慈照館」

ホールにて催されました。

当日は寒さにもかかわらず・柳の下・四海波・若松等会員諸氏が日頃の稽古の成果を披露されました。

温習会の最後をかざって、保之師の小謡・鬘清があり、会員一同狂言小謡を堪能することができました。

終了後、保之師を囲んで慰労会が行われ、有意義な会の幕を閉じました。やがては熱田神宮の能楽殿において、この会が、盛大に催されることになるよう期待したいものです。

(和泉会同人)

二月の予告

- 二月六日 午前十一時始 梅猶会
 - 能三 輪 梅若 盛義 西村 欽也
 - 能三 砧 佐藤 友彦 西村 欽也
 - 能三 梅若 猶義 高安 滋郎
 - 能三 和泉 保之 高安 滋郎
 - 能三 石 橋 梅若 修一 西村 弘敬
 - 能三 井上松次郎 西村 弘敬
- 二月十三日 興会
 - 能三 入間川 佐藤卯三郎 井上礼之助
 - 能三 佐藤 秀雄 井上 祐一
- 二月二十日 観世会
 - 能三 高 砂 観世 元昭
 - 能三 井上松次郎
 - 能三 葛 城 観世 元正
 - 能三 佐藤卯三郎
 - 能三 玄 象 観世 喜之
 - 能三 井上礼之助
 - 能三 末 広 佐藤 秀雄 井上 祐一
 - 能三 たなびき会

藤田流笛方金森準三師旧冬二十八日逝去謹んで哀悼の意を表す

新年 賀 謹

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-------|-----------|---------|---------|---------|-------------|---------|-----------|---------|---------|---------|---------|---------|-----------|-----------|-----------|-----------------|
| 石 謡 | 河 村 鉦 | 西 尾 孫 太 郎 | 加 藤 良 久 | 鬼 頭 八 郎 | 前 田 昌 広 | 藤 田 六 郎 兵 衛 | 衛 田 兵 衛 | 田 鍋 惣 太 郎 | 林 甲 子 夫 | 野 崎 太 郎 | 久 田 秀 雄 | 片 岡 道 子 | 高 安 滋 郎 | 田 鍋 惣 一 郎 | 内 藤 泰 二 郎 | 友 藤 泰 二 郎 | 名 古 屋 能 楽 鑑 賞 会 |
|-----|-------|-----------|---------|---------|---------|-------------|---------|-----------|---------|---------|---------|---------|---------|-----------|-----------|-----------|-----------------|

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------|-----------|---------|---------|-------|-----------|-------------|-----------|-------|-----------|-------|---------|---------|---------|-------|-----------|-------|-----------|-------|---------|---------|---------|-----------|-------------------|-----------------|-------------|-------------|-----------|--------|
| 名 古 屋 能 楽 俱 楽 部 | 植 村 真 太 郎 | 風 韻 二 会 | 殿 島 修 二 | 幸 友 会 | 福 井 啓 次 郎 | 金 剛 流 松 風 社 | 片 野 東 四 郎 | 掬 水 会 | 柴 田 初 太 郎 | 曲 水 会 | 増 田 一 雄 | 金 竜 三 会 | 金 森 準 三 | 春 鶯 会 | 山 田 仁 三 郎 | 正 樂 会 | 加 藤 丈 太 郎 | 松 謡 会 | 佐 藤 太 俊 | 清 風 二 社 | 大 塚 一 二 | 掬 水 青 陽 会 | 能 楽 協 会 名 古 屋 支 部 | 支 部 長 田 鍋 惣 太 郎 | 名 古 屋 和 泉 会 | 会 長 徳 川 義 親 | 狂 言 共 同 社 | (イロハ順) |
|-----------------|-----------|---------|---------|-------|-----------|-------------|-----------|-------|-----------|-------|---------|---------|---------|-------|-----------|-------|-----------|-------|---------|---------|---------|-----------|-------------------|-----------------|-------------|-------------|-----------|--------|

狂言

狂言人語

名古屋地区は何十年来珍らしい大雪に見まわれ連日雪景色、神宮の森も白く雪に包まれて冴え渡る鼓の首は殊更心にしみ渡る様です。

中京能界の長老石井流の西尾孫太郎氏が初頭一月六日急逝されました三日の新年語初めにもお元氣な姿で出ていられたのに今更乍ら生命のはかなさをしみじみ感じ感無量でした。

謹んで哀悼の意を表します。

交通の便がよくなり名古屋東京大阪と近々二、三時間で結ばれる今は此頃東西名士の交流は地元の空気をぐんぐん盛り上げて芸事向上の一途をたどっておりませう。これで物価騰貴の方のスピードアップがおさえられたらと思ふ事です。

今月も梅猶会や観世会が催されます梅若猶義師を初めとして陸続と来名される名演能家に皆様もお忙しい事と存じます。やがて来る三月の名匠鑑賞能に至るまでよいお能が見られることを喜んで頂きましょう。一月二十五日から京都の仙田雪山子が大丸で個展を開かれました。

二月の催物

二月六日	梅猶会	梅若 盛義	西村 欽也
二月六日	梅若 友彦	高安 滋郎	
二月六日	梅若 猶義	西村 弘敬	
二月六日	和泉 保之	井上松次郎	
二月六日	梅若 修一	井上礼之助	
二月六日	井上松次郎	佐藤 秀雄	
二月十三日	興会		
二月十三日	観世会	午前十一時始	
二月二十日	観世 元昭	西村 欽也	
二月二十日	井上松次郎	高安 滋郎	
二月二十日	観世 元正	西村 弘敬	
二月二十日	佐藤卯三郎	井上 祐一	
二月二十日	観世 喜之		
二月二十七日	井上礼之助		
二月二十七日	佐藤 秀雄		
二月二十七日	たなびき会		

狂言解説

入間川川目出度く訴訟に勝って故郷へ帰る大名、途中の入間川で入間の何某と珍妙な人間言葉の対話が始まります。大名狂言の多くの大名は無知、田舎者として扱われていますが、これは奇智に富んだ仲々利口な大名です。末広川あまりにも有名な脇狂言。

昭和41年2月1日発行
発行所
名古屋市中区英門前町5/2
井上重兵衛方 電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電(541) 4881

狂言点心

野村 広二

末広がりとはい先の広がった扇の一種ですが都へ上った冠者はまんまとだまされて傘を買って来てしまいました。怒った主人の機嫌を直そうと冠者はスッパに教えられた雛子物を囃し始めます。やがて冠者の雛子に浮かれた大名は……お目出度い狂言です。

一月二日、事始めのつもりで、「翁と舞」(日本古典読本・謡曲・風巻景次郎)のくだりをよむ。実は、このほかに、正月せびとも耳にし、目にした一本の一筋があった。ルネ・シフェール氏の「世阿弥・能の伝書」(狂言八二号掲載)で「花鏡」(かきよう)のなかの「舞者為根声」(ぶしやいこんじよう)の章、後半の「目前心後」のところであった。この方は、手廻しよく、M教授にお願ひして、昨年末、特に席を設けて、講読していただいた。テーマの「目前心後」もきれいな、フランス語になっている。明せきな文章で、冗漫さがない。少しカトリック臭いと申し上げたが、そういうことにはない由。「定めて花姿玉得の幽舞に至らん事、目前の証見なるべし」も見事である。よんでは口訳していただき、世阿弥のことをよみあげ、日本の学者の口語訳を口ずさむ。そして、先へ進む。M教授が打明けられた二つの大事な話は、いづれ先生から発表の機会があるが、学生のころ、アランの「散文論」の講義を、谷川徹三先生から、きいたときのように、この夜も深い感銘をうけた。シフェール氏のことは渡辺一夫氏夫妻の渡辺の記事(図書、四〇・九月号)と先頃帰国の橋岡久馬君の滯仏通信(能楽タイムズ、四〇、一月)に紹介されている。

八日、はじめて街に出る。目当ては菅原通済氏蔵の「天神名画展」(松坂屋)と「中国二千年の美展」(丸栄、ともに毎日主催)「北野天神縁起絵巻」で「清涼殿落雷」の一軸は「来殿」「妻戸」の能をおもい出す。「中国」の方は、王羲之の書「集字聖教序」「永泰公主」の画拓本だけとおもったが、古陶磁の「枕」に目をうばわれた。その破片の一つにも夢がある。「邯鄲の枕」の幻想がふと浮ぶ。あの「永泰公主」の石の蓋には、干支の刻れているのをみつけた。今年の馬は真上にあった。さて、「馬」にちなむカレンダーは週間朝日(一・七)が秀逸。関市のG市からおくられるのが楽しみ。「円空曆」の、今年の台紙の藍色も、その週刊朝日九・十月の「黒馬」の下半身の色と、期せずしておなじであった。狂言では、「止動方角」(しどうほうかく)「那須ノ語」が馬とおなじみだし、能では「絵馬」「朝長」「小督」「藤戸」「蟻通」。といくつもありません。また十三日は「歌会始」。御題の「声」につながる曲は、「末広」のおわりのあたりで、大名が太郎冠者をよびかえすと、うれしまきれに口をついてでる太郎冠者のあの「それお声じや」が印象深い。

正月の放送(NHK)では、今年の「翁」は金剛流。「福の神」(大藏太郎)と「福部の神」(ふくべのしん

茂山千五郎、一月十五日千作を襲名がおもしろかった。「福部の神」は和泉流と演出が随分ちがっている。ほかに「木六駄」(三宅藤九郎)、「竹生島」(喜之)もたのしかった。演能では、名古屋学生能・狂言の会が十回目を迎えた。慶賀にたえない。本では、「神々の仮面」(朝日ジャーナル、一・一六、三隅治雄)、「能楽堂の新劇」(芸術新潮、一月号)、「海外演能公演」(邦楽七号、観世元正・鶴賀朝太夫)、「雪国の秘事能—黒川能」(太陽二月号、文・増田正造ほか)、「交代期にきた狂言界」(朝日、一・一五萬)など。「近代芸術観の成立」。(高橋義孝)はまだよんでいない。

梅の花

西村弘敬

二月は大体に梅の花咲く季節であります。尤も熱海のような温暖な土地では既に一月には梅花の咲くとの事、又木曾の山中では、四月の下旬頃に梅、桜桃、杏子(あんず)など、春の花が一時に咲き揃い誠に賑かになります。斯様に土地に依って必ずしも一定しては居ないものの、大方の平地では二月頃が梅の季節の様に思われる、本号も二月でありますので、梅に因んだ謡の事を少し詮索してみました。

先づ草木の精を人格化して作られてあるもの、仮令へば「杜若」「藤」「六

浦の楓」などと同様に梅の精を作った曲に「梅」というのがあります。其の外に梅という文字の出でる曲は随分沢山にある様で、「東北の軒端の梅」「老松の飛梅」とか殊に高砂の中にある「梅花を折って頭(こうべ)に挿せば、二月の雪衣に落つ」などの句は実にうまく表現したものと常々感心して居る次第であります。其の外梅の文字は「巻絹」「弱法師」「胡蝶」「鉢木」「田村」等数へれば随分沢山ある筈であるが、彼の勝修羅として縁起を悦ばれる「簾」などは、殊に梅花を頌へたもので、これは平家物語などにも出て居る所で、源氏の侍梶原平三景時は嫡男源太景末、次男平次景高、三男の三郎景家等と共に手勢五百余騎にて逆木(さかもぎ)を取除き平家の陣内へ乱れ入り、縦横無盡に駆け廻り暴れ戦い颯と引上げ外に出た所、源太景末の姿が見えぬので、源太を討たすなど、再び城内へ駆け入った時、源太は崖(がけ)の下迄押し込まれ、甲(かぶと)も打ち落とされ、大童(おゝわらわ)の姿となり、郎等二人を左右に立てて、敵五人に取り囲まれ苦戦して居たのを、父子して敵三人を切り伏せ、二人は手を負わせて辛うじて救い出す事が出来た、これが梶原の二度の懸(にどのかけ)と云われたのは此の時の事である、其の戦に人目を引いたのは、源太景末が梅の花を服に挿して居た姿である。

吹く風をなんとい、けん梅の花
ちりくる時ぞ香は匂ひける
という古歌の心を知るや知らずにか東

国勢の中にも風流な武者は居る。「花籠」「花籠の源太よ」と敵方平家にもいはやされたとの事である。源太景末も此の縁起によって彼の梅を八幡殿の神木と崇敬したとの事である。尚梅に関する語は数々あれども余り長くなるので一と先づこれと定める次第です。

三月の予告

- 三月六日 九阜会 追善会
能 弱法師 植村真太郎
能 井上 祐一
- 三月十日 邦語会
能 鶴 龜
能 土蜘蛛
- 三月十三日 邦語会
能 花 争 野村又三郎 佐藤 秀雄
- 三月二十日 名匠鑑賞能
能 盛 久 宝生 九郎 高安 滋郎
能 熊 野 宝生 英雄 西村 弘敬
能 小 鍛 治 辰巳 孝一 西村 欽也
- 三月二十一日 竜吟会
能 吉野天人 塚本 秀雄
- 三月二十七日 青陽会
能 隅 田 川 井上 義次
能 天 鼓 観世 武雄
能 柴田 収武
能 井上 祐一
- 能 空 腕 野村又三郎 井上礼之助

協会よりのお知らせ

天野登茂子氏 囃子披 稻生社中

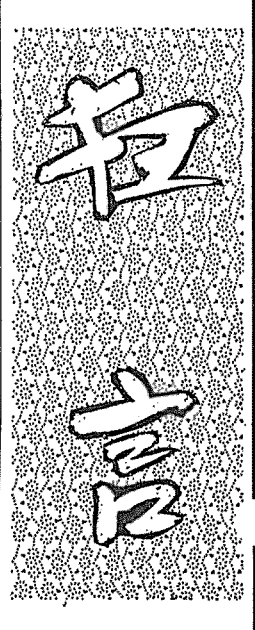
石 田 特 許 事 務 所

士 士
理 学
弁 法

石 田

名古屋市昭和区都島町 2 の 10

TEL 051 1330



昭和41年3月1日発行
発行所
名古屋市中区東門前町5/2
井上重兵衛方 電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電(541) 4881

狂言人語

春、三月。日毎に暖かくなって行くのが感ぜられます。新しいものがすくて芽をふきはじめる季節、卒業式、入学式と新しい出発があらちらこちらに見られることです。

さて中京能界も今月は三月二十日の名匠鑑賞能を初め数多くの番組を組んでおります。皆様の暖かい御声援をお願いしたいものです。

三月の催物

三月六日	九皋会	追善能
能 弱法師	植村真太郎	
能 半 菰	井上 祐一	
能 間 藤	中村 つゆ	
能 橋 弁慶	佐藤 友彦	
能 間 観世 喜之	井上松次郎	
能 花 争	野村又三郎	佐藤 秀雄
三月十三日	能楽教室鑑賞会	
能 鶴 亀	片山慶次郎	西村弘敬
能 間 大野 弘之	梅田 邦久	西村 欽也
能 土 蜘蛛	片山博太郎	高安 滋郎
能 間 井上 義次	井上松次郎	佐藤 秀雄
能 附 子	井上 祐一	佐藤 秀雄
三月二十日	名匠鑑賞能	午後一時始
能 盛 久	宝生 九郎	高安 滋郎

狂言解説

能 熊 野	井上礼之助	西村 弘敬
能 小 鍛 冶	辰巳 孝	西村 欽也
能 花 盗 入	佐藤 秀雄	井上松次郎
三月二十一日	竜吟会	
三月二十七日	青陽会	正午始
能 吉 野 天 人	塚本 秀雄	西村 弘敬
能 間 井上 義次	井上 祐一	
能 間 隅 田 川	観世 武雄	高安 滋郎
能 天 鼓	柴田 収武	西村 欽也
能 間 井上 祐一	野村又三郎	井上礼之助

狂言解説

花争IIのどかな春の日に花見に出掛けた主と冠者。所が主が花見と云えば冠者はあれは桜見だと云い張ってひきません。とうとう二人で古歌を引き合いに花、桜論争が始まります。

不須II秘蔵の砂糖を留守中に食べられまいとした主、二人の冠者に不須という大毒じゃと云いつけておきました。……砂糖を食べられまいと思つたばかりにとんでもないことになってしまいました。

花盗人II庭の花の見事さにこっそり忍んで一枝折り取らんとした盗人、花主に見つづられてしまいます。風流な盗人と花主、やがて一首詠んで意気統

合し酒盛りの後、帰り際に花主はみやげに一枝折ってやります。
空腕II憶病者のくせして日頃大言壮語を吐く太郎冠者を試さんと夜道を使に出しました。案の如く立木に腰を抜かしたり拳句の果は様子を見に出掛けた主を盗人と間違え太刀をさしだしてしまいました。さあ帰ってから太刀の云い訳をするのですが……。

狂言点心

野村 広二

二月も末になると、空もなんとなしに春めいてまいります。三月はひなまつり。狂言には見当らないとおもいますが、いかがでしょうか。あつてもよいとおもいます。あれはお教えを乞いたいものです。さて、この文章は、例年のことながら、一月、二月の催しのまとめです。正月は「翁」からはじまるといわれますが、名古屋ではみられないので、金剛能楽堂へかけて、永謹（ひさのり）君の披ぎで拝見した。当日は、途中、雪一色の関が原あたりがまことにすがすがしく、雪をかむつた松の木立の丘の眺めは、「翁」行にかつこうのしばらくであった。永謹君の成長ぶりには期待が大きい。またその初会で、茂山千作、千五郎襲名狂言会にいけなかったわたくしも、新千作、千五郎と千之丞三氏の「石神」（いしがみ）をみるこができたし、放送（NHK）で、おなじ三人の「牛馬」（ぎゅうば、ラジオ）もきいたし、「花子」（テレビ）もみた。「石神」は関西風の雑煮でありながら、さらりとした味のある一番だった。名古屋では二月梅猶会の「入間川」（卯・祐・礼）

が秀逸。そのときの「砧」（猶義）は大層見事。放送（NHK）では、ほかに、「節分」（万之丞・万作、テレビ）講談「世阿弥」（松浦泉三郎作・一竜奇貞花口演）「日本音楽道しるべ」雅楽と謡曲（吉川英士）。本は、①「今月の能から一翁」（沼州雨観世一月号）②「日本古典演劇への関心—西ドイツ」（一・六）「すぐれた復元—菓争（このみあらせい）」（林屋辰三郎、二一三、どちらも朝日ジャーナル）「明恵上人（一）」（白洲正子、学鑑一月号）「日本文学の系統」（大場俊助）。三月は、「橋弁慶」（喜之）と「熊野」（宝生英雄）があります。

「道意本」及び「道甫本」について

先に河村家蔵の「型付け本」について触れたが、こゝで山脇和泉家に伝えられたと思われる伝書について考察しながら同書の性格を究明する基盤としたい。同家の台本中最も古いと思われるのは「天理本」（天理図書館蔵）であるが書写年代は寛永頃と思われる。これについては後に書写された「和泉古本」（和泉保之師蔵）の「昆布売」の頭注に「此狂言道意本ニハ大名シテト有、是モ然ベシ」とあり、この「道意本」が天理本をさすものであるろう。道意は二世山脇和泉元永であるが寛永十二年から正保二年まで約十年間宗家として在職しているの、やはりこの間に書写されたと云えよう。大藏流でも最古の「虎明本」が寛永十九年書写であり、殆ど期を同じくしている。「和泉古本」もやはり詳細は不明であるがずっと時代が下り文政年間書写の「雲形本」の「昆布売」の後注には「此狂

言道意本ニハ大名シテト有是モ然ベシ、ト道甫本ニ有也」との書き込みが見えている。これは明かに前述の注をさしてあり、従って「道甫本」が和泉古本をさすものと云えよう。道甫は三世山脇和泉元信であり承応二年から元禄六年まで四十年間在職している。年代の空白は二世元永が早世したため一旦隠居した初代源助が後継者無き為再び家を継いだものらしく（山脇和泉家流伝統之碑文）従って幼少から三世元信は宗家となつたものと考えられる。そこで書物を書写する様な年令もやはり後半の二十〜十年間と思われ、天和、貞享から元禄の初期頃ではあるまいか。ともあれ、「天理本」「和泉古本」が道意道甫の手になるものであることはほぼ確実であり、当時その書写した、人の号によって「道意本」「道甫本」と呼ばれていたものである。これは大蔵流の伝本がやはり同様に「虎明本」「虎清本」「虎寛本」と称されていると比べて妥当な呼称であろう。かつて東京にて三宅藤九郎先生の御指摘にあったが、「道意本」（天理本）の表紙の右肩に墨で「一」の文字が三冊とも記されており、又「道甫本」（和泉古本）の表紙の右肩には同様に「二」の文字が各冊とも記されていることに気が付き、成程と思つたものであった。尤論これは後人が書き加えたものである。両書とも未だ完備された体裁をもつものではないが、古体を知る上で非常に貴重なものである。「雲形本」の集大成に当って七世山脇元業はこれらの古本を大いに参考としたらしく、ことに道甫本を多く引用して「古書ニハ云々」と注を付している。

「道甫本」以後、しばらく山脇家の台本は現れないが、やがて弟子家の早川幸八家に「波形本」が現れ、又例の「型付け本」も見られ、そして六世元貞は本居宣長に従学して学問的にも優れた人物であつたらしく多くの狂言本文を改定していった。その跡を受け次いだ七世元業は元貞の教えを守り、古本を参考としつゝ、山脇家狂言の集大成を意図し、「雲形本」の書写にとりかゝつたのである。以後今日まで「雲形本」は名古屋の狂言界で最も権威あるものとされている。

こうした山脇家の大きな流れの中で「型付け本」がどの様な位置を占め、どれ程の価値を持つものであるか、今後明らかにして行きたいと思うものである。

(佐藤友彦)

「新聞」社発行「健康随筆」より
胃 ガ ン

胃ガンには玄米、ハトムギ、菱の実の三つを主食させることが第一、また、ハマチシヤ、梅干、新鮮な野菜、キノコ類（とくにナメコ）、センプリ（岐阜県の山岳に自生、皇漢薬局にある）イチヂク、キャベツの青い葉（農薬に注意）などといふことはすでに何度も書いたが、ソ連では最近中国医学との交流で「松脂」（ヤニ）が有効だといふのだした。

いづれにしても血液のアルカリ化が最も大切（酒や肉類は強い酸性）このためにはカルシウムの補給が第一、栄養

濟など飲むならカルシウムの多い小魚を骨ごと食うことの方が大切だ、カルシウムは血液を正常なアルカリ性に導き、病的物質の存在を許さない、カキのカラを粉にしたものがいい、一日二グラム位が適量、今東光和尚は、毎日お寺の台所にはうなメクジを食つていて「銀色の小便がでるほど」体は快適という、ナメクジはカルシウムの固まり、カタツムリでもいい、英国ではこれが最高の料理の一つというがさもあるう

四月の予告

四月三日 観衡会	能 經 政 橋岡 久共	西村 弘敬
四月十日 幸友会	能 誓 願 寺 観世鉄之丞	高安 滋郎
四月十七日 観世会	能 天 鼓 井上礼之助	西村 欽也
	能 天 鼓 武田太加志	
	能 墨 塗 佐藤 友彦	
	能 墨 塗 和泉 保之	井上松次郎
四月二十四日 観正会	能 安 宅 吉川宇良子	高安 滋郎
	能 乱 井上松次郎	井上礼之助
	能 乱 松井 ちえ	松井 省吾
	能 狂 仏 師 佐藤 秀雄	佐藤 友彦
四月二十九日 清韻会	能 蟬 丸 大規 文藏	岡次郎右エ門
	能 卒 塔 婆 小 町 井上松次郎	岡次郎右エ門
	能 海 士 泉 喜夫	西村 欽也
	能 伯 母 ケ 酒 野 村 又 三 郎 佐藤 秀雄	佐藤 卯三郎

安 田 信 託 銀 行

貸付信託 五年モノ 7分3厘7毛
予想配当率 二年モノ 6分5厘

名古屋支店 名古屋市中区栄町三丁目 (25) 5 1 7 1
駅前支店 名古屋市中村区笹島町一丁目 (54) 1 3 1 7

狂言

昭和41年4月1日発行
 発行所
 名古屋市中区東門前町5/2
 井上重兵衛方 電(321) 1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 有限会社 安井印刷所 電(541) 4881

狂言人語

うららかな春の陽は、草の芽に暖かい光をそそぎ桜便りもテラホラ聞かれる今日此頃

演能も活気を負びて、火花を散らし互に芸を競う、素晴らしい舞台を展開される時期となりました。

陽春の圧観は中日会館に於ける中日五流能によって代表されるでしょう

当代五流の代表を最高に組合せて豪華番組は必ずや斯界に大きな反響を呼ぶ事でしょう

五月第一週は飛び石連休演能も隔日に催されます 御期待下さい

四月の催能

四月三日	観衛会		
四月十日	幸友会		
四月十七日	観世会	正午始	
能 経	正 橋岡 久共	西村 弘敬	
能 誓願寺	観世鉄之丞	高安 滋郎	
能 天 鼓	井上礼之助	西村 欽也	
能 間	武田太加志	佐藤 友彦	
能 墨塗	和泉 保之	井上松次郎	
能 安 宅	吉川宇良子	高安 滋郎	
四月二十四日	観正会	九時始	

狂言解説

墨塗II遠口へ下ることになった大名、在京の内通いつめた女の家へ暇乞いに行きますが、女が別離の悲しさに泣くのを見て、大名もついホロリ……所が実は女の涙と見えたのは……

仏師II仏像を作ってもらおうと都に上った田舎者、スッパにその旨を頼みます。仏師に化けたスッパは自から仏像となつて田舎者をだまそうとするのですが……

伯母ケ酒II酒屋を伯母に持った男、何んとか酒を飲もうとするのですが伯母は仲々首をたてにふりません。そこで鬼に化けて嚇して飲んだまでは良かったのですが……

シフエール教授 橋岡久馬氏の出会い

本紙八二・八七号(四〇・九、四〇・一)でフランスの学者、能の研究家、「世阿弥—能の伝書」の著者ルネ・シフエール氏のことを紹介しましたが、仏留學、昨年末帰られた橋岡久馬氏が同教授の消息を能楽タイムズ(四〇・一年)に寄せられておりましたので、今こゝをたずねましたところ、親しくあわれた様子について、次のようなお話をいただきました。同氏のお許しを得ていただき、教授のお手紙までもみせていただき、因みに同教授は橋岡氏と同年輩(四十三才)、本年五月頃来日の予定の由、なお教授の手紙の訳はM教授をわづらわしました。

狂言点心

野村 広二

今年はいつまでも寒かったが、四月にはいって、花のたよりがしきりになる。わたくしの家も桃と桜の花が少し開いてはなやかさを添えてくれる。毎朝のって街の中心にでるバスからも、椿と桃と桜がみえる。小暗い神社の境内に隠見する紅い椿の花。路線の横丁に遠くみえる紅と白の大きな桃の木。広々とした学校の校門わきの二本の桜のあかるさ。わづかの間であるが、目に楽しい。それにうぐいすである。今年はずれが四月になつても、庭をおとすれくれた。朝、ヒルと夕方、「ホーホケキョ」のなき声にもいとおりかあるのなきがういた。三とおりまではききわけられる。ここ二・

ことばです。「まことに申しわけありませんでしたが、長い間ご返事も差上げなかつたことをお許し下さい。しあげねばならなかつた仕事で大へん忙しかつたのです。そして数か月ほんとに過勞いたしました。しかしながら、ゆっくり暇をかけてお会いしたいと存じます。それで、もしできましたら、次の金曜日、そうです、十一月十九日にここまでお出かけ願えませんか。昼食をご一緒にするつもりで、十一時にサン・ラザール駅を出発する汽車に乗り、モンテ・ラ・ジョリにきて下さい。私は駅でお待ちいたしております」
 こうして橋岡氏は昨年十一月、シフエール教授を訪ねることになりました。待望の一日は幸多かつたこととおもいます。(H)

三年はくることもまれであったけれど、今年には本当によくやってきた。ガラス戸越しにその姿をみたり、早朝雨戸をあけるのもやめて、じっとときき入り、やがて声の遠くなるのを待ってあける日もあった。のどかなひとときに余情をおぼえ、能楽堂へ余り行かないこの頃の空白をみたくした。

さて、楽しかるべき春を待たずになぐられた本田秀男氏のことふれた。氏は二月二十八日に逝去。惜しい人をなくした。おだやかな姿、何ともいえない円るさと滋味あふれる芸、呂の声と思ひ出はつきない。かつて氏の師事した故榎間弓川演ずる「関寺小町」の後見座にこれも故人の金春八条とならんだ姿はいまもって忘れたい。毎年春の伊勢神宮奉納能におあひするの桜咲く頃。はなびらが一ひら二ひら散る楽屋でしばらく談笑することもこれからはない。奈良・熱田能楽殿などであうこともない。「源太夫」「巴」

「道成寺」「鶴飼」「蟻通」(秀麗会)「乱」「石橋」それと「砧」。どれもしみじみとした味のある能芸であった。名古屋とは随分ゆかりも深かった。狂言への理解も広かった。かたくなでない古武士の風。いつまでも木綿ガスリの対の和服に袴の似合う氏の面影がなつかしい。古格の能がまた一つ遠くへ消え去ったのが実に寂しい。昨四十年の熱田神宮能楽殿十周年記念能の仕舞がわたくしのみおさめとなったが、去る一月十五日付で「その後元気が、去る一月十五日付で」その後元気が、去る一月十五日付で。医師が大変むつかしいことをいうので閉口いたしてあります。寒い間中用心することになりました。いづれまた」といつもみられた字でおことばいただいたのが別れとなった。氏のご冥福をあらためて

お祈りしたい。また「謡曲大観」の著者佐成健太郎氏も三月四日逝去された由。

演能では、名匠鑑賞能の「熊野」(宝生英雄)とそれにつづく「花盗人」(佐藤卯三郎・井上松次郎)。この組合せも興が深い。放送では、野村万作・万蔵の「釣狐」、「かきと山伏」(こどものための日本音楽物語)ほか (NHK)。本では「幻術と曲芸」(李家正文、正倉院随想)「花祭り」(宮尾しげを、諸国祭礼行脚)「世阿弥」(唐木順三、中世の文学・新版)「さびとわび」(中村俊定、国文学四月号、芭蕉特集号)「能面の名匠水見宗忠」(北日本新聞、三・四)「能を大衆に」(沼艸雨、随筆サンケイ四月)。

四月は、「誓願寺」(観世鎮之丞)「卒都婆小町」(大槻秀夫)、五月は完成の中日ビルで「中日五流能」が催される狂言は二番、期待したい。

琵琶に縁のある能

西村 弘 敬

此頃観世会の能に玄象(げんじょう)の能が上演せられた。此の能には藤原師長郷の事と琵琶の名器玄象と獅子丸(ししまる)の名が出てくる。又経政の能には青山(せいざん)という名器の名も出てくる。蟬丸の曲には琵琶を弾く事はあるも琵琶の名前は出て居らぬ、そこでこれ等の名器はいつの頃から有ったものかを少々詮索して見ました。

人皇五十四代仁明天皇の御宇嘉祥三年(西歴八五〇)に、掃部の頭貞敏(かものかみていびん)と申す人が、渡唐の時大唐の琵琶の博士廉承武(れんしよ)について秘曲の伝授を受

け、且つ玄象、獅子丸、青山の三面の琵琶を譲り受けて帰朝した時、途中海上波荒れ、止むを得ず獅子丸一面を海中に沈め、辛うじて帰つてく事が出来、二面の琵琶は宮中に納まりて以来宮中の秘蔵となった。其の後人皇六十二年)天皇が清涼殿にて琵琶の御催しがあつて玄象を遊ばされし時、康承武の亡霊が御前に来り先きに貞敏に伝えたのは流泉(りうせん)、啄木(たくぼく)の二曲で、今一曲の上支石上(しよりげんしやくじょう)の曲を伝えなかつた科により魔道に沈倫仕る、今之れを君に授け奉り度く存じ参りましたとて、御前に建ててあつた青山の琵琶を取つて上支石上の曲を奏して伝へ奉つた。此の事があつて以来皆人々が恐れをなして青山の琵琶を用いぬ様になつたので、之れを御室仁和寺の守覚法親王の許へ遣はされた。

玄象の琵琶は其の後大政大臣であつた藤原師長郷はしばしば勅命を受けて演奏した事もあつた由である、此の師長郷は先きに保元の乱に連座して土佐へ流され、一旦復歸して後またまた平の清盛の為に尾張井戸田へ流ちやくされた、名古屋の井戸田に其旧跡もある師長郷は元來管絃の道に秀いで居り殊に琵琶の名手として妙音院とも云われた人で、或る時熱田神宮へ参詣して宝前で流泉の曲を演奏したるに、神明感応に堪へずして宝殿大きに鳴動し、人々感を催おし満座密異の思ひを致したとの事である、又仁和寺の青山の琵琶は其の頃幼少より召使われて居た平の経政に下し預けられて居たが、平家の都落ちの際に経政は之れを持参し法親王に御返し申上げ、其時法親王は

昭和四十一年五月一日 午前十時始
於 熱田能楽殿

謡調会十五周年記念能番組

兼 島	浅野 静子	服部 紗枝
屋 島	石井 静子	寺田 鈴子
千 手	加藤 静子	
藤 戸	横山くに江	柵橋くに子
砧	岩塚 静子	
胡 蝶	山本 章代	早川 とよ
葛 城	神山 とも	
花 月	渡部知江子	武内 薰代
松 風	中村 つゆ	
玄 象	小 数	植村 きん
菊 蕊 童	幸 江	小 数
江 口	田中 きんこ	石井 鐘子
雨 月	大野 美津子	渡部知江子
雲 林 院	村 瀬 つね	
遊 行 柳	鈴木 きくゑ	
仕 半 節	池 上 梢	
安 宅	鹿 取 文子	
西 行 桜	大 鹿 栄子	戸 田 和子
卷 絹	中 村 つゆ	
融	後 藤 鈴子	本 見 静子
番 外 仕 舞	森 幸子	武 内 薰代
小 銀 治	網 之 段	笹 之 段
祝 言 半 能	玉 之 段	笠 之 段
高 砂	祝 言 半 能	枕 之 段

終了予定午後六時

主催 謡 調 会

飽かずして別るる君が名残りをば
 後の形見につつみてぞ置く
 と一首の御歌を下されたので経政は
 呉竹の笈の水は変わるとも
 猶住み飽かぬ宮の内かな
 と御返歌申上げて戦場へ駆け向つた
 の事である。流泉、啄木の曲は仁和寺
 教実法親王の雑色(ぞうしき)蟬丸が
 伝へて居て、宮の御逝去の後逢坂山に
 庵を結んで隠栖して居たのを、克明親
 王の御子三位源の博雅(ひろまさ)が
 聞き伝へ、何んとか伝授を受けんと三
 年も通いつづけ、遂に三年目の八月十
 五夜に漸く蟬丸に逢つて相伝を受けた
 由である、

猶蟬丸は謡曲には延喜帝(醍醐帝)
 御子の様になって居るが、實際は左
 様ではないらしい。

「天正狂言本」

拾い書 (一)

今日舞台で演ぜられて狂言は、
 ほど江戸期に入ってから固定し、なお
 ゆるやかに変遷しつゝ江戸末期に至つ
 て完全に固定して今日に至っているも
 のである。江戸期に入ってからの変遷
 の過程は現存する台本などの研究によ
 ってかなり明らかになつて、あるが、
 その以前、狂言の激しい成立から流動
 期の姿を知るの資料の見当らないこ
 とから極めて困難と云える。その中に
 あつて唯一の資料とされているのがこ
 の「天正狂言本」(以下「天正本」と
 略称)であるが、これとて百四番につ
 いて筋立ての覚え程度を記したものに
 すぎず、その概要を知ることとはやはり
 困難である。しかしながら今日の姿か
 らさかのぼりつゝそれを比較する時、
 我々はそこに多くの興味ある狂言成立

期の事情の一端を見出すことが出来よ
 う。こゝにその内から気付いた点につ
 いて一つずつ未整理のまゝ触れて見た
 と思ふ。

「天正本」を見てまず気が付いたの
 は、太刀を振りかざして追い込む型が
 非常に多いことである。はっきり記さ
 れているものを拾つて見ると「棒縛り」
 「栗焼」「鞍馬参」「なまぐさ物」「き
 しゃく」「と草」「近衛殿の申状」(こ
 の内「と草」「近衛殿」は廢曲となつ
 ており、「きしゃく」は現行「磁石」
 である)等がそれである。またこの内
 の「と草」は記述では「おとす」と
 「おとす」と見えている。この「おとす」に
 ついては書中「西の宮参」(廢曲、冠
 者の抜け参りを扱つた、不奉公者らし
 い)の中に「大明出て人をよひ出し、
 ふほうこうとゆふておとす」と見えて
 いる。「おとす」と同じかと考えられ、
 これから考へると「と草」での「おと
 す」と「おとす」はどうかと叱りどめ
 の様である。即ちこれによると一曲の
 太刀を抜いたの追い込みにも、叱りど
 めにも演じたものと考へられ、演出も
 その場に依つてかなり幅があつたこと
 がうかがわれる。その他、「天正本」
 には記述の省略が多く、とめの不明な
 ものゝ中にも、或いは叱りどめや、太
 刀を抜いたかどうか不明な追い込み
 「ふみさき」——現行「文荷」など
 なども、時に依つて太刀を振りかざし
 て追い込むものがあつたとも十分考へ
 られそうである。ともあれ、こうした
 ことは疑いの余地のないものである。
 所でこれを今日の狂言と比較して見る

と、主と横着者の冠を扱つた狂言の
 追い込みは大体太刀で追い込んでい
 ることに気が付く。即ち今日では主が扇
 で冠者を追い込む型が「天正本」では
 太刀を用いて追い込んだと云えるので
 ある。今日でも太刀を振りかざした追
 い込みは残っている。「磁石」「盆山」
 「子盗人」などがそれであるが、これ
 らはいずれもスツパや盗人相手に限ら
 れており、主と下人の場合には見当ら
 ない。「空腕」という主従の狂言があ
 るが、これには古台本「道意本」「道
 甫本」(「天理本」「和泉古本」狂言三
 月号参照)及び「型付け本」(同一号
 号参照)等に刀を抜いての追い込みも
 記されているが「雲形本」にはすでに
 叱りどめとなつて他の主従狂言と統一
 される。(なお「狂言三百番集」「狂
 言集成」にはやはり太刀を抜いた追い
 込みが見えており、同流でも派により
 異なることがわかる)

「天正本」に表れた演出は確かに荒っ
 ぽい。今日の洗練された舞台芸術とし
 ての狂言とは到底比ぶべくもないが、
 しかしその荒っぽさは当時の民衆達の
 現実の生活に定着した生き／＼した何
 物かを持つていたはずである。
 この太刀を抜いた追い込みも単に演
 出上での荒っぽさが次第に洗練され、
 形式化されて扇子一本で追い込む型に
 統一されたと云うものではなからう。
 「昆布売」と云う狂言がある。見栄
 っ張りを取り扱つたものであるが、古
 くから同趣向の「二人大名」と共に狂
 言の持つ諷刺の典型的な例としてよく
 挙げられている。これは大名と商人(

下人)と云う本来主従的な身分關係に
 あるものが逆転し、そこにかもし出さ
 れるアンバランスによる笑い、又強い
 はずの大名が意気地のない弱虫である
 ことの諷刺による笑いが中心となつて
 いるのであるが、この二つの狂言で最
 も重要な役割を果しているのが、実は
 他ならぬ太刀なのである。即ち「昆布
 売」に於ける商人も、「二人大名」に
 於ける下人も、大名の不当な要求に対
 し一応は屈するのであるが、それも、
 あくまで自己を主張してゆずらず最後
 に大名が腰に手をかけるに到つて是非
 なく屈するのである。それは自己と相
 手を対等の立場に置いているのであつ
 て結局は自己が無力であるために屈せ
 ざるを得ないのだが、それ故自己の手
 に太刀が渡つて来た時には最早自己が
 優位な立場に立つたことを知っている
 のである。即ち、この二つの狂言で主
 従關係はそれ自身が決して絶対的な關
 係であるのではなく、刀をどちらが所
 有するかによつて簡単に倒置されてし
 まう性格のものであつて、江戸期に於
 ける絶対的な身分秩序の中からは生れ
 るべくもないものである。そこに働い
 ているものこそ室町から戦国時代にか
 けての乱世の掟であると云えよう。南

北朝の終りから戦国の乱世へと下剋上
 の風潮が一般化した時代、乱世に生き
 抜く人々は各々が生き抜くためには実
 力を他を押しつけて行く以外にないこ
 とを打ち続く混乱の中で学び取つたは
 ずであつた。弱肉強食という乱世の掟
 は狂言の中にも反映され、時には「猿
 座頭」のような残酷なまでの笑いを創
 造している。盲人の不具者が妻と清水

へ花見に出掛け酒盛をしている。のどかで美しい夫婦愛の情景に見えるが、そこへ若い猿引が来合せると女は不具者の夫を捨て猿引と逃げてしまふ。何も知らぬ座頭はとりのこされ、妻と思つてひきよせた猿にひつかれ、傷ついで逃げ廻るといふものであるが、盲人の不具者を徹底的に情容謝なく傷つけ、いためつけて笑ひものにしていく。これらを今日「あくどいもの」と見るとは異なり、当時の人々にはむしろ当然の掟といふべきであつたらう。自分の知恵才覚と肉体的実力でたくましく生き抜く者達は、愚鈍な田舎者をだまして甘い汁を吸ひ、たとえ主従の關係にあつても常に機をうかゞつて主のすきに應じてやりこめ、出し抜いてはたらふく飲んだり食べたり、挙くは主を笑ひ者にする冠者達。身分關係は未だ確立されず、彼らを支配したものは「力」であつた。その「力」こそこれまで触れて来た「太刀」なのである。

「太刀」は支配における絶対的な切り札であつた。特に「天正本」の頃、身分秩序の未だ確立されていない時代にあつてはさうであつた。主が横着者の冠者を支配するためには不可欠のものであつた。太刀を抜いての追い込みも、そこまで主従が肉迫しあつて居ることのあらわれではなからうか。兩者の關係はその後さらに明確にされて行く。江戸期に入り幕藩体制が確立され身分秩序もそれに伴い固定化され、絶対化される時代がやってくる。能と共に幕府の式楽に抱えられた狂言は今や支配者の意識に添うものであらねばならなくなつた。下人に対して支配者がこともあろうに太刀をふりかざして追い込むなど苦々しいらうばい振りであらわすものとなつた。つまり、主は下人に対して權威を持つて叱りつけるかせいぜい扇で追い込むようにしなければならなかつたのである。主従狂言に限つて次第に太刀を抜いての追い込みが消えていったのも、こうした配慮があつたことであらう。永い年月の間、数多くの流動、変遷を続けて来た狂言の一つ／＼の今日の姿には、重たいその時代の人々の生活と意識とがぬりこめられて居るはずなのである。今日演ぜられる狂言の姿を媒介としてさかのぼりながら我々はその年月の足あとをさぐつて見たいものである。

佐藤 友彦

なお「天正狂言本」については朝日古典全書「狂言集下」に付録としてまたわんや書店刊「狂言古本二種」に古川久氏により翻刻されています。

タマゴ酒づくりの秘法

生卵十個を割り、焼酎(35度のもの)五合をよくかきまぜて、さらに白ザラメ一斤を加える、これで約一升になるが、これを冷暗所に半年間寝かせる、一日一回天地にゆさぶると、ザラメが上下する、このザラメがとけるまで半年かゝつてOKとなる、この秘酒は、ドロリとした原酒ゆえ、日本酒でうすめ、冷やでよし、カンでよく、味もきつめも満点、さらにニンニクをオロシて入れると、チカラ倍増とある、長期貯蔵ほど強くなる。

二日酔で吐く時は、小豆(あずき)を煮てとべるとよくなる、アロエの葉を

生でかじるとまもなく頭がすかっとしてくる、酒毒で健康をそこねたら菊の花を水で煎じてのむ、酒席の肴によくテや酔興や、美しさばかりでつけてあつたのではない、食べて酒毒を消すためだ、酔いをさますには柿の実を食べる。

五月の予告

五月一日	謡調会	砂有賀	滋子	西村	鉄也
五月三日	建宝会	井上松次郎	高安	滋郎	
五月五日	風韻会	野村又三郎	井上礼之助	佐藤秀雄	
五月八日	霞会	井上松次郎	井上松次郎	井上松次郎	
五月十五日	鳳鳴会	山本一	高安	滋郎	
五月二十二日	柳水会	井上松次郎	井上松次郎	井上松次郎	
五月二十九日	中日五流能	井上松次郎	井上松次郎	井上松次郎	

中日劇場開場記念
中日五流能
昭和四一年五月二十九日(日)
於 名古屋市栄町 中日劇場

第一部 (午前十時始)

宝生九郎 高安 滋郎 金春惣右エ門
鶴亀 谷口 勝三
曲入 森田 光治

観世元正 松本 謙三 金春惣右エ門
百 萬 龜井 俊雄
法楽之舞 藤田六郎兵衛 茂山千五郎

花月 豊島弥左エ門
遊月 大西 信久
遊行柳 喜多 節世

金春栄治郎 久保田直亮 齊田喜兵衛
卒都婆小町 曾和 博明
附祝言 森田 光春

第二部 (午後三時始)

梅若万三郎 松本 謙三 谷口 勝三
藤戸 大根渡 藤田六郎兵衛
蹠之伝 大根渡 藤田六郎兵衛
世 阿彌 辰巳 孝 忠度 藤井久雄
融 金春信高
榎の酒 三宅藤九郎 和泉 保之

後藤得三 龜井 俊雄
花 管 岡次郎右エ門 大倉長右エ門
舞入 森田 光治

山 金剛殿 久保田直亮 金春惣右エ門
白頭 杖之型 曾和 博明
附祝言 森田 光春

主催 中日新聞
後援 文部省・文化財保護委員会
入場料 二,〇〇〇、一,五〇〇、一,〇〇〇、五〇〇 (全部指定席)
出演能楽師、名古屋市内各ブレイガイ
F 中日新聞各地本支社にて取扱う

狂言

狂言人語

重文個人指定に能からワキ方松本謙三氏シテ方近藤乾三氏が挙げられたそれにつけても金春流の孤墨を守って苦しい戦いの中にならされた本田秀男氏を今更のように惜しむものである。東洋一と称される中日会館の完成を期して中日五流能がその豪華な舞台で開催される。五月の薫風と共に誠に心癒しい事である。

五月の催能

五月一日 謡調会 午前十時始
能 高 砂 有賀 滋子 西村 欽也
能 半 蔀 鹿取 文子 高安 滋郎
五月三日 建宝会
能 芦 刈 秋草 勲 西村 欽也
能 井 筒 鈴木 武 西村 弘敬
能 小 銀 治 西松 醇厚 高安 滋郎
五月五日 風韻会
能 鶴 龜 富士道周明 高安 滋郎

昭和41年5月1日発行
発行所
名古屋市中区坂門前町572
井上重兵衛方 電(321)1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電(541)4881

五月八日 霞会
能 鞍馬天狗 山本 一 高安 滋郎
五月十五日 鳳鳴会
能 杜 若 大野 弘之 西村 欽也
能 融 神戸 鏡子 西村 弘敬
五月二十二日 松謡会
能 加 茂 河村 鉦二 高安 滋郎
五月二十九日 中日五流能
能 鶴 龜 宝生 九郎 高安 滋郎
能 百 萬 観世 元正 松本 謙三
五月三十一日 卒都婆小町 金春栄治郎 久保田寛亮
能 二 部 野村又三郎 松本 謙三
能 藤 戸 梅若万三郎 松本 謙三
能 花 籠 大根 渡 和泉 保之
能 山 姥 後藤 得三 岡次郎右衛門
能 樋 の 酒 井上松次郎 久保田寛亮
能 三宅藤九郎 和泉 保之
能 口真似 佐藤 友彦 佐藤卯三郎 井上松次郎

狂言解説

蝸半||祖父の長命の薬にと主命でかたつむりを取りに出かけた太郎冠者。あまり遅いので迎えに出た主が見つけたものは「でんくむし」と嘲しながら山伏を同道して来る冠者でした。

寝音曲||謡上手の冠者を何んとか謡わせんとする主。度々謡わされては迷惑と冠者は色々注文をつけるのですが、とうとう主の膝枕を女に見たて、謡わされる破目に陥ってしまいます。

重喜||師匠の髪をそらんとする重喜、「弟子七尺さがって師の影を踏まず」という師の言葉を守りかみそりのつかを七尺五寸にとりのべて。

口真似||さる方から樽肴を貰った某。一人たぶるもいかどと思ひ、冠者に云いつけて吞相手を求めにやります。所が冠者が同道したのは。

抜殺||使に行く前には必ず盃をせびる冠者、今日も和泉の堺へ行くとして呑んで、途中で酔いつぶれてしまいました。様子を見に行つた主はこらしめのためと。

樋の酒||所用で出掛ける主が二人の冠者に、一人は銭蔵、一人は酒蔵と別々に留守居を申し付けて行きます。蔵をあげかけた二人は互に小窓から連絡し合っている内に……。

狂言点心

野村 広二

四月は金春流伊勢神宮奉納能のある

月ですが、本年はご遷宮御木曳行事の準備から取り止めになる。東本願寺能も、これはわたくしの都合から行けなかつた。例年、伊勢路の菜の花の黄一色の美しさが見られないとおもっていたところ、中旬、バスで京都に向う名神高速道路の、八日市と栗東の間で、両側にこれを見ることができ、車中まで菜の花の香りと色に染まったようだった。これは「大会(たいえい)」(金剛殿)をみるため、週末のヒル下りの京都はしづかであった。天狗が獅子の座とみたてた台の上に、仮に釈迦となつて出現、説法し給う莊嚴の場をみせるあたり、微妙の力演。装束は喜多と金春の間の由、同席の金春のT氏からうかがつた。間(あい)狂言の役が、難をうけた天狗と難を救うたワキ僧のいきさつを語るのもおもしろい。それから、名古屋観世会で「誓願寺(せいがんじ)」(鉄之丞)。一遍上人と和泉式部の霊が登場するこの能は、「教の道も一声の」の次第から、「更にも妙なる称名の数々しかじか」の切りまで、いわゆる「お経くさい」能。ふと「弱法師」の能が頭をかすめる。あれは梅と夕日影。これは桜と夜念仏。能と仏教思想のつながりは深い。今月には仏教示現の能を二つまでみる。そのときの狂言は「墨塗」(和泉保之、祐一、松次郎)。重量感たっぷり。本では「日本の音」能、狂言「(小泉文夫、音楽の友、5月号)」、「今日の世界における大学の役割—日米の文化交流」(ヒューボートン、英語研究5月号)。「根尾の猿楽」(朝日、四、一九)など。展覧会では、人間国宝新

狂言

狂言人語

小誌も第九〇号を迎えました。狂言一筋、さやかな祈りをこめて、綴り来たったパンフレットですが、思いの外皆様の御好評をうけ、一同張切っております。百号を目指しての努力を御期待下さい。

去る五月八日、愛知県の新城で狂言同好会創立十五周年記念の演能会があり、狂言十五年誌として同会の大原紋三郎氏の手によるパンフレットが作成されました。二十八頁程のもので、十五年間歩みを刻明にかきとどめ、且つ新城の能の歴史を記載した資料として誠に好評でした。

六月は熱田祭を初めとして又々盛大に続きます。和調会、青陽会、観世会、全国学生宝生会、宝生定式能と続々続きます。

七月には朝日狂言会が九日に開演されます。今回は、大藏流宗家、大藏弥太郎氏を招いて、「呼声」と「左近三郎」の二番を善竹忠一郎氏、善竹圭五郎氏と共演でおねがいしております。

和泉流は「懐中舞」和泉保之氏他、「大般若」共同社「六地藏」の三番では、はしなくも大藏和泉宗家の来演とな

昭和41年6月1日発行
発行所
名古屋市中区東門前町5ノ2
井上重兵衛方 電(321)1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 公井印刷所 電(541)4681

りました。皆様の御期待に副うべく目下鋭意計画中です。

奮って御声援下さい。

古川久先生(東京女子大教授)よりは小誌に対して何時も、御指示御鞭撻を頂いて一同感激しております。誌上を借りて御礼申し上げます。

(H)

六月の催能

能	六月五日	熱田祭奉納能	一部	河村 鉦二	西村 欽也
能	六月十一日	和調会	舟ふな	井上松次郎	井上祐一
能	六月十二日	青陽会	小銀治	竹腰 勝一	高安 滋郎
能	六月十一日	和調会	謀生種	野村又三郎	井上礼之助
能	六月十二日	青陽会	自然居士	河村 鉦二	高安 滋郎
能	六月十九日	観世会	杜 若	井上松次郎	西村 欽也
能	六月十九日	観世会	鉄 輪	久田 秀雄	西村 欽也
能	六月十九日	観世会	膏藥煉	佐藤 秀雄	井上礼之助
能	六月十九日	観世会	靨	梅若万三郎	西村 欽也
能	六月十九日	観世会	靨	井上祐一	西村 欽也
能	六月十九日	観世会	靨	片山博太郎	西村 弘敬

狂言解説

能	一角仙人	佐藤 秀雄	高安 滋郎
能	磁石	井上礼之助	河村 丘造
能	小銀治	伊藤 久子	山田あき子
能	犬山伏	舟橋 允就	服部 交司
能	六月二十六日	宝生定式能	近藤 茂
能	靨	辰巳 孝	西村 弘敬
能	靨	佐藤 友彦	高安 滋郎
能	靨	宝生 英雄	高安 滋郎
能	靨	佐藤 秀雄	高安 滋郎
能	靨	井上松次郎	井上礼之助

舟ふな||西の宮へ参詣がてら遊山に出かけた主従、途中神崎の渡し場で例のごとく渡し舟を呼ぶと口論が始まります。「ふな」だと云ってきかぬ冠者と「ふね」という主、さあ歌を引用してのこの口論は……。

謀生種||嘘の嘘でいつも伯父にだまされる男、今日は反対にだましてやろうとしてのりこみますが、またくだまされてしまいます。実は嘘の上手には謀生の種があると云うのですが……。

膏藥煉||鎌倉の膏藥煉と京の膏藥煉が互の名声を聞き知り、日本一をかけた争うことになりました。系図争いからやがて実力の勝負となり、遂に京の膏藥煉が打勝って意気揚々と引き上げて行きます。

磁石||人買いにだまされて売られた男自分を売った金を逆に取り逃げて逃げ出しますが、追いつかれて刀を振り上げられて「吞まう」とやり返します。唐土日本の潮界、ちくらが沖の磁石山に

狂言点心

野村 広二

すむ磁石の精ともっともらしく云いなして……。

犬山伏||乱暴者の山伏と一人の出家とが茶屋で行き合い、山伏のあまりの乱暴さにたまりかねた出家は力競べをすることにします。茶屋の銅ついている犬をなつかせる勝負ですが、山伏の呪文と出家の誦文、果して軍配は……。

靨||例の手なぐさみで一人召使う下人まで打ち込んでしまいました。所が冠者は先方へ行っても少しも云う事をきません。そこで一たんつれ帰って縄をなわせるのですが……。太郎冠者の独壇場です。

五月に入って岐阜県のG町をたづねる。国鉄沿線はまだれんげの花盛り。汽車が川に沿って奥へ奥へと走る頃は、目前に展開する山の緑に、何事も忘れて、窓外の景色にばかり気をとられた。三・四冊能の本を持ってでかけたが、終日とうとうと寝てばかりいた。小さな町をつばめが飛びかう。何年ぶりぞつばめをみたことだろう。能の稀曲にめぐりあったみたいだ。五月は中日五流能が話題。当日は雨のしとしとと降る日。新築の中日ビルを九階まで上がる。名古屋の街がはるか眼下に煙って眺められる。豪華な場内である。三方を黒一色のカーテンでおおった舞台の中に、仮設の能舞台がかっこよく設けられてある。新しい設計には並々ならぬ努力と苦心があったにちがいない。いわゆる「中日型」ともいえるべき舞台がここに定るといった感じである。名古屋にもう一つ演能場所が生れたことは本当に楽しいことです。

オモテをつけた役者がハヤシ方のならぶ後方にいても、シテ正先にでも、つけたオモテの明るさがかわらないのは成功の装置。舞台と橋掛に屋根がなく、舞台後方の老松をかけた鏡板が残してあるのはいままでと同様。そのりっぱな鏡板は少しカブキ調の彩色であるようだ。シテ柱とワキ柱がなく、そこには、橋掛と地裏(ぢうら)をかこう勾欄のおわり、またははじまりを意味する、「ぎぼし」をつけた小柱が立っていたのは解せなかった。勿論目付柱ははぶかれていたが、「ぎぼし」をつけてしまえば、もうシテ柱とワキ柱を略したのではなく、そういうものはないという「新様式」を主張するのだろうか。古風と古式をかたくに固守するわけではないが、「中日型」の新舞台を受け入れるまでには、相当の時日があるようです。揚幕も、真中に金色と思うが、一筋、タテに線のおつた黒い幕、いや、三方の「カベ」は濃紺だったかもしれない、ここから登場するシテやワキや狂言の役者たちが、パツと明るい前身になるのも興をいだ。ウタイや楽器の音は、固く、やわらかくひきしまつて、ころよかつた。演能は中日劇場で初回のこととて、「翁」の上演を期待していたが、これをあえて持出すのは主催者側に失礼だろうか。それに、これでは、「道成寺」がみられませんか。やがては「道成寺」拜見の声もおこるでしょう。それにも賢明な断が下されるにちがいない。能では、「卒都婆小町」(金春栄次郎)と「山姥」(金剛殿)にとてつよい感銘をうける。狂言「樋(ひ)の酒」(三宅藤九郎・和泉保之・三宅右近)も大層よかった。名古屋勢では井上松次郎が「山姥」の間(あい、里

人)で活躍したのはうれしかった。来年の第十二回は三月下旬の由。好番組のようです。さて、この日は、わたくしにとつて一日中能や狂言を楽しむ日だった。朝、八時から放送の「隅田川」(杉浦元三郎)、十一時から「日本音楽道しるべ」狂言(横道万里雄、どちらもNHK)。それから中日五流能。すめば、沼・北岸・香西・中村・前西諸先輩と別れて、雨中を急ぎもどり、能「道成寺」(観世寿夫、NHK)をみる。能にあげて能にくれるとはこのことでしょう。次に、一月からの演能では、「卒都婆小町」が二回(金春栄次郎・大槻秀夫)。この二回の能については別記したい。それと「高砂」(観世元昭)、「誓願寺」(鏡之丞)、「藤戸」(万三郎)、「砧」(猶義)、「熊野」(宝生英雄)に、狂言は「末広」(佐藤秀雄・井上祐一・佐藤友彦)、「花盗人」(井上松次郎・佐藤卯三郎)、「墨塗」(和泉保之)が印象にのこる。「鶴亀」(盛久)(宝生九郎)と「ぬけがら」(茂山千作)をみなかったのはおしい。また四月に「比叡山展」(毎日ほか、松坂屋)があった。前田青邨えがく舞楽「崑崙八仙」(こんろんはっせん)を中心の伝教大師御絵伝中「落慶供養図」が解説書の表紙。「久隔帖」(きゅうかくじょう)と「青不動」が眼目だったが、右の御不動様に、「舟弁慶」や「葵上」などでワキが称える四明王の像が出品されていたのも興深かった。五月の「沖繩文化展」では、山辺知行氏蔵の女物の装束(紅入り)が印象にあざやか。放送では、先述の「日本音楽道しるべ」能・狂言(横道万里雄ほか、五河)、「この人この道」茂山

千作) NHK、「三代の芸」野村万蔵・万之丞・耕介(CBC)。本では、「英語青年」イエイツに謡曲をうたつた人、阪倉篤太郎教授(六月号)、「ドイツの日本文学」(西義之、読売、四、二八)、「新城狂言十五年誌」(新城狂言同好会)、「標準音楽辞典」(音楽之友社、能・狂言・世阿弥ほか数項目掲載)、「能のいのち」(生方たつえ、大法輪六月号)、「芸能史研究」(十三号)、美術手帖「日本の仮面」(六月号)、「今回の風土記」(2)「奈良」(光文社、興福寺の頂)、「富山県立観光美術展洋画二位」能の印象(奥野茂清、北日本新聞、五・二六)。

なお、夏をこえ九月には、宝生流が渡米して、各地の大学で演能予定とのこと。演ずる曲は「井筒」「通小町」など。団長は宝生英雄氏。日本文学研究家のドナルド・キーン氏(コロンビア大学教授)のとりなしが実った能のアメリカ行と報ぜられた(朝日)。公演旅行の成功をお祈りします。

七月は朝日狂言会。好演を期待したい。

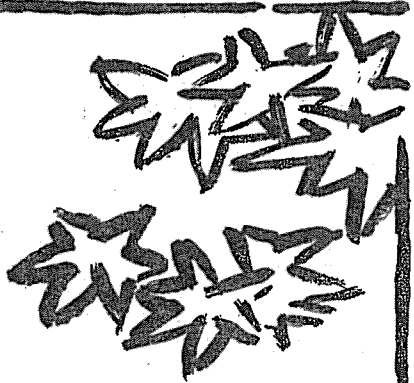
求 塚

西村 弘 敬

求塚という曲は観世、金春、兩流には無かったが先年観世流では復活せられて近來所々で上演せられている。此曲の筋は古く万葉にも取りあげられているし、又大和物語にも出て居る。謡本では最初生田川の近くの野辺で、若葉摘み女が多く出て来て草摘みの情景を美しく謡っており、其の後に求塚の事に入って行く、此求塚というのは撰津の国今の神戸の辺かと思われるが生田川の近くに一人の美女があった、

司 茶 子
茶 子 茶 子 茶 子

中區丸の内一丁目五ノ二三
② 五 七 六 九



名をば菟名日少女(うなひおとめ)と云った、又其の頃小竹田男子(さきだおのこ)と云うのと、血沼の丈夫(ちぬのますらお)と云う二人の若者があつて、之れが彼の女に同時に恋慕して互に競い争つたあげく、あの生田川に浮ぶ鴛鴦(おしどり)を舟にて射て、当て射落した者が女を得るといふ約束をして、いよいよ鳥を射た処、偶然にも二人の矢が一羽の鳥に当つて、勝負がつかなくなつた、こゝで女はどちらにもなびくこと出来ずなり、思い煩らい遂に川に身を投げて死んだので、直ちに取り揚げ塚を拵へて葬ひつた、之れを見た二人の男は此塚に求め来り遂に互にさし違へて死した、これにより求め塚と云われる様になつた、女は自分の為二人の男を死なせた罪業にて冥途で二人の男の為に左右から責めさいなまれ、地獄の苦患の有様を謡つたが此謡本の大筋である。

に男の塚 山来た、此事が諸方へ伝わり広がり、賢きあたりへも聞へて憐みの歌など数々詠まれたとの事である。其後或時通りかゝりの旅人が此塚の下で野宿して居た処、夜半に人の争う音の氣配を感じ不思議の思ひをなしつつ、眼つたが夢に一人の男血にまみれて来り「我れ敵(かたき)に責められ惱み居る故御太刀を暫く御貸し下され」といふに思ひながら太刀を貸し与へた、やがて彼の男来り「御徳により年頃妬き(ねたき)者を打殺しました。今よりは貴方の御守護(おまもり)となり申さんと申しした、その内に夜が明けられたれば人は誰も居ぬのに塚の辺りには血が流れ、又太刀にも血がつき居りたり、真実とは思へぬとも聞きしまゝに訳すなり」と書かれてある。謡の求塚の後日談の様にも思へるので参考に御目にがけます

住みわびぬ我身なげてむ津の國の 生田の川は名のみなりけり
そこで之れ等の親達は死骸を引きあげて塚を造つて葬ひつたが、一人の男は和泉(いづみ)の國のものだから此土地の土にて塚を造事を許されず、やむなく和泉の國より土を船にて運び塚を造つたとある、女の塚を中にして両脇

は全く異なり現存しな(の)續いて「三人わらひ百しやう」「三人百しやう」と並んで見えている。これはいわゆる百姓狂言であつて、それ、現行の「三人夫」「昆布柿」の原型とも云うべきものである。まず「三人百しやう」と「昆布柿」とを比較して見よう。

第八回朝日狂言会

- 七月九日 五時三十分
懐中 和泉 保之
左近三郎 善竹圭五郎
素囃子 羯 鼓
大盤若 井上松次郎
呼 声 大藏弥太郎
狂言 小舞 声 刈
六地藏 佐藤卯三郎
井上礼之助
井上義次

朝日新聞社 狂言共同社

ぶ(昆布)まゝに所榮へり」といふ歌で日記に紙の意を籠めても面白さが割引かれる点も考へてのことであろうが、ともかく古くは三人という人物構成であつたのである。この三人の劇中の役割は全く平等同じ立場にあるのであつて、今日でも同様な性格のものに「三人長者」「三本柱」「三人夫」などが挙げられよう。「三人夫」は

天正狂言本 捨い書き(その二) 佐藤友彦

として見えているが「三本柱」「三人長者」は同書には見えない。しかしながら「三本柱」は例の河原勸進申樂にその名が見え古くからあつたものであり、「三人長者」も内容等から後の作とは考えられない。

同書の三人立ての物として注目すべきものに「竹生嶋まふて」と「大く」とがある。「竹生嶋まふて」は弁財天、竹生嶋へ参詣する三人が道連れとなつて参詣し、連歌する、やがて弁財天が出現し色々な物を下されてめでたくもとの社に納まる、といったものであり、「大く」も全く同様の筋立てで、やはり「三人出てやないどのこくうざうへ参」と三人立て狂言と云うべきものである。「大く」は現行の「大黒連歌」であるが、現行「大黒連歌」では大蔵流(虎寛本)によると一ノアド、二ノアドの二人の参詣人とシテの大黒という人物構成になつてゐる。和泉流では「道意本(天理本)」では(不明確な点もあるが)どうやらアドとツレと亭主の三人でやはり天正本に近い姿であると云えよう。それが現行和泉流となるとアドとその太郎冠者、そして立衆という一つの典型に整理されてゐるのである。

即ちこの「三」という数字は能楽の大成者である世阿弥がしばしば重要視した数字であり、美学的、幾何学的にも最も安定した形式であり、数字であると云えよう。翁の式三番もこの数をとるものであり、やはり狂言に於ても「三人」というのが本来の基となるべき姿と考へられたのではなからうか。しかしながら、せりふを中心とする会話劇、特に狂言に於ては常に三人を同じ立場で同じ重さを持たせて舞台を進めて行くのは困難なはずであつた。劇

的対立は二人の方がより単純、明快、形式的である。そして三人目はこの二人から少し離れた所にあつて聞き手にまわり、整理進行にあたり、時には対立の中に入つて変化を持たせる、これが狂言が長い時代の中で洗練され、形式化された結果生み出した最も単純素朴で明快な舞台構成と云えよう。主従狂言の主と二人の冠者、百姓狂言の奏者と二人の百姓がそれである。「三人百しやう」の三人と一人は「昆布柿」の二人という形に進み（大藏流「大黒連歌も同じ）、「大こく」の方はアドと下人と立衆という形に進められた。この二つの例はいづれも本来「三人立て」という形からの移行といふべきであり狂言の人物構成をさぐる上で興味のある点を含んでいと云えよう。

現行の「三本柱」は筋立ての上から三人の形を動かすことは出来ないものであり、また「三人夫」は御前で詠む歌が三人共極めてうまく（稚拙ではあるが）処理されているので三人のまゝのこり得たのであろう。

続

七、八、九月の催能

- 七月 九日(土) 朝日狂言会 五時三十分
- 七月 十日 正楽会 囃子会
- 七月 十七日 淡交会 ゆかた会
- 七月 二十二日 高校生鑑賞会
- 能 葵 上 内藤 泰二 高安 滋郎
- 能 蛸 牛 井上松次郎 佐藤 秀雄
- 能 養 老 片山博太郎 高安 滋郎
- 能 瓜 盗人 佐藤卯三郎 井上礼之助
- 八月 六日 市民納涼能楽会 若宮大通
- 百小 能 督 梅田 邦久 西村 欽也
- 能 佐藤 友彦

- 能 紅葉狩 内藤 泰二 高安 滋郎
- 能 蚊相撲 佐藤卯三郎 井上礼之助
- 八月 七日 邦謡会 ゆかた会
- 八月 二十一日 大家能 文化講堂
- 能 竹生嶋 久田 秀雄 西村 欽也
- 能 半 蔀 大家 一二 西村 弘敬
- 能 土蜘蛛 内藤 泰二 高安 滋郎
- 能 武 悪 井上松次郎 佐藤 秀雄
- 能 九月 四日 名匠鑑賞能別会 午後一時始
- 能 翁 観世喜之 三番叟 和泉保之
- 能 木 賊 大西 信久 高安 滋郎
- 能 半 高 砂 井田 文二 西村 欽也
- 能 狂言末定 九月 十一日 中部金剛会 井上松次郎
- 能 舟 弁慶 豊島三千春 西村 欽也
- 能 九月 十八日 観世会 高安 滋郎
- 能 景 清 柴田初太郎 高安 滋郎
- 能 九月 二十三日 林潤水会追善囃子会
- 能 九月 二十五日 婦人師範連合会
- 七、八月号は休みます

協会よりのお報せ

- 福井たみ子氏囃子披 丹下 社中
- 村木玲子氏囃子披 佐藤太社中
- 竹腰勝一氏小銀治披 辰巳 社中

お報せ

脇方、西村欽也師宅新設電話
(八、一)五九一九

舞 中 見 暑

- 一 河 謡 村 鉦 二 会
- 邦 梅 田 邦 久 会
- 藤 加 藤 良 久 会
- 長 鬼 頭 八 郎 会
- 中 前 田 昌 広 会
- 竜 藤 田 六 郎 兵 衛 会
- 観 衛 会
- 霞 田 鍋 惣 太 郎 会
- 澗 林 甲 子 夫 会
- 観 野 崎 太 郎 会
- 高 久 田 秀 雄 会
- た な び き 会
- 観 田 鍋 惣 一 郎 会
- 調 内 藤 泰 二 会
- 名 友 会
- 古 屋 能 楽 鑑 賞 会

- 名 古 屋 能 楽 俱 楽 部
- 植 村 真 太 郎
- 風 殿 島 修 二 会
- 幸 福 井 啓 次 郎 会
- 金 剛 流 松 風 社
- 片 野 東 四 郎
- 掬 水 柴 田 初 太 郎 会
- 曲 水 増 田 一 雄 会
- 春 山 田 仁 三 郎 会
- 正 加 藤 丈 太 郎 会
- 松 佐 藤 太 俊 会
- 清 風 大 塚 一 二 社
- 掬 水 青 陽 会
- 能 楽 協 会 名 古 屋 支 部
- 支 部 長 田 鍋 惣 太 郎
- 名 古 屋 和 泉 会
- 狂 言 共 同 社
- (イロハ順)

狂言

昭和41年9月1日発行
 発行所
 名古屋市中区奥門前町6/2
 井上重兵衛方 電(321) 1430
 名古屋狂言共闘社
 印刷所
 有限会社 安井印刷所 電(541) 4881

狂言人語

心配させた、いくつかの迷走台風も大したことなく通り過ぎ、いよ／＼秋が近づいたことをこの身にひし／＼と感ぜられます。一年間のわずかの休暇とも云うべき七、八月を終えた楽会では最も充実すべき季節を迎え盛り沢山の番組を揃えております。是非御観賞下さい。

扱、この夏の話題だったのは、恒例となった大衆能に加えて、若宮八幡社で新能が大盛況の内に演ぜられた事です。時代の移り変りは古来から伝えられたものを遠慮なく葬り去って行くものですが、暗い話題の多い今日、名古屋人の心の故郷とも云うべき若宮社の境内に灯った一つの火を大切に灯し続けて行きたいものです。

九月の催能

九月 四日 名匠鑑賞能別会 午後一時始
 能 翁 観世喜之 三番更 和泉保之
 能 木 賊 大西 信久 高安 滋郎
 能 高 砂 井田 文二 西村 欽也
 狂 三人片輪 三宅藤九郎 井上松次郎
 和泉 保之
 九月十一日 中部金剛会 午後二時

狂言解説

能 小 督 金剛 殿 西村 弘敬
 能 舟 弁慶 佐藤 友彦 高安 滋郎
 狂 鳴子遣子 佐藤卯三郎 井上松次郎
 井上礼之助
 九月十八日 観世会素謡会
 能 景 清 柴田初太郎
 九月二十三日 林原蔵追善素謡会
 九月二十五日 婦人師範連合稚子会

三番隻「能の「翁」の中で演ぜられる狂言方の受持つものであるが、芸というより五穀成就を祈る一つの儀式の様なものである。古来から「翁」と同様神聖な役とされ、又かなり芸力、体力の要求される事から、狂言師としての道を歩む最初の習物の一つとされている。

三人片輪「博奕で身をくすした男達、或る有徳人がわけあって片輪者を召抱えりと高札を打ったのをさいわい、片輪に化けて訪れる。さて主人が各々に蔵をあずけて外出すると、たちまち彼等は本性をあらわし……」
 鳴子遣子「秋の野へ連れ立って出かけた二人、稲田にカラ／＼となる物を見つ、鳴子か遣子かで賭け縁にする。ところが、判者に頼んだ茶屋の亭主は……」

狂言点心

野村 広二

ようやく秋風の気配が感ぜられる季節を、八月下旬になって、迎える。七月、岐阜県G町へ四度目でかける。かすんだ夏の空に月が出る。ちょうど川をはさんで、向う側のうちつづく山の上高くである。わたくしが歩けば、月もいっしょに進んでくれる。町中の丘のお寺にいく。立木の梢をとおしておなじ月がよびかけてくる。お堂はしまっているが、たしか壁に、白隠禅師の「衆生本来仏なり云々」ではじまる和讃坐禅儀ははってあつたはず。何度も冒頭の句をくりかえす。堂前の泰山木の花が白く匂ってくる。能のシテが、さまざま幽霊姿であらわれてはきえる幻覚にさそいこまれる。ふとわが家の泰山木も今頃はと思いが走った。八月末になると、空の月がきれいにみえた。この夏は、例年以上に、能の本も続まねば、何もせざらにおわつた。M教授と暑さしのぎの柳川鍋の店にすわり外国の日本文学研究の話を承ったのがせめてもであった。夏の催しには、朝日狂言会と今年第一回の市民納涼野外能(夜能)と大衆能(能楽協会名古屋支部)があつた。どれも盛であつた。ただ次のことを今さらのように考えさせられた。よい能、狂言とは各役が一つにまとまり、器用、たくでなく、おたがいが気合にみち、間をいかし、深い心で表現の深秘につき入ることが大事ではないか。えてして、表現にまけてしまふ。「能の心」のつかみ方にあるのだらうと。本では「特集、狂言を考えろ」(テアトロ八月号四篇)、「道としての茶と芸術としての茶」(谷川徹三、談交七月号)、ほかの三、四冊と、放

送のことは次号にゆづりたい。
 九月の名古屋の催しに期待しましよ
 う。

「天正狂言本」拾い書き

廢曲となつた狂言の於母影

その一

「天正本」の目録を開くと、若干の重複はあるが約百五十番の曲名が記載されている。しかしながらその本文が実際に記されているのは百四番であつて、この内で現在伝えられていない廢曲となつたものが二十三曲、ほとんどの二割を占めている。

竹生島まふで、とくき、ゆ立、こけ松、連歌の十徳、鬼松風、西の宮参鳥せんきやう、木こり歌、木の入殿の申ぢやう、だちん座頭、ぬのかひざと、梅盗人、弓山立、つらときいもあらひ、たらしぎと、京金、松山鏡、ほつけ念伝、犬引ぎと、墨つけ、おまきよせ、

以上であるが、これだけの数の狂言が廢曲になつてゐるにはそれなりの理由があるであらう。ともあれ狂言の成立期から江戸期に至るまで激しい時代の流動の中で数多くの狂言が生まれ、或るものは一回限りで消えたものもあるし、又或るものは時代の變遷の中で自らの姿を変遷させつゝ生き残り固定して行く、そうした流動期狂言の様相をとどめるものである。

狂言の流動の歴史には大きく二つの流れがある。一つは演劇としての狂言が次第に形を整え、いわば演劇としての狂言それ自体の持つ内的必然性により練磨、淘汰されて来た歴史である。例えば前掲の「鳥せんきやう(鳥説法)」

は現行の「魚説法」と同類曲であり「大引き」とは現行の「猿座頭」と同類であるが、いずれも現行曲の方がある意味では舞台芸術として優れておりまた「とくさ」「西の宮参」「いもあらひ」などはいずれも冠者の不奉公物の類であるが、こうした同類曲の中で劇としてより優れたものが生き残り他の類が廃曲となるのは当然であった。又、洗練された舞台芸術としての道を歩む狂言は、あまり趣向が奇抜なもの卑俗、猥雑なものは除外されるのが当然であった。「つらとき」は唐人の鏡とぎが女の顔をとがんと仰むけに転ばし、顔をとひで水をかけるというものであって、これが廃曲となるのは当然であった。

こうした方向と密接な関連を持ちながらその変遷に影響を与えたもう一つの流れが、時代の流動、変遷など、外的諸条件の変化に伴う狂言の流動の歴史であって、最もドラマチックな狂言の展開である。それは室町時代、南北朝の動乱から下く上の戦国時代を経て身分関係の確立する江戸時代までの激しい動乱の歴史をそのまま、反映し出している。そこには狂言を生み、育て支えて来た人間の歴史が重たくきざみ込まれていると云えよう。

これら二つの面は常に密接な関連を持って互に働らき合いながら狂言の歴史を形成しているのだが、以下、廃曲となった狂言を中心にながめながら、「天正本」にあらわれている狂言の歴史の一端をさぐって見たい。

まず「湯立」であるが、これはいわゆる農村の神事狂言であり、現在でも地方の農村には残るそうだが、あまり農民的色彩の濃すぎるため江戸期に入つて喜ばれず、廃曲となったものであ

る。湯立は神前に釜を握え、湯をわがし、巫女が両手に笹の葉束を持ち、この熱湯に笹束をうけて身にぶりがける神事である。「天正本」中の木曲も殆どこの行事をそのまま舞台の上で、舞と囃子の内に演じたもの、ようであり、文中からは滑稽味を表わす部分はいくつか見えない。もう一つおもしろいことに壬生狂言にはこの「湯立」という狂言があり、此狂言の最終結願の日に、一回だけ上演することになってい

る。壬生狂言の方でも大体本書と同様の湯立の行事を舞台上でするだけ（但し両狂言とも巫子ではなく神主が笹を振るらしい）である「をかし」を追求するといふより文字通り農民の農耕農作を祈る祈禱的要素が強く、能の「翁」と三番叟それとの関連が思われるのであるが、ともかく農民の意識（こゝでは主催者が大名となっているのも興味ある問題）がこの狂言に大きく反映しているのは否めないであろう。

狂言の発生の基盤は南北朝内乱期の近畿地方の農村を背景としていると云われるのであるが、農村を舞台とし、農民の意識が大きく反映されているものとして興味ある狂言であり、それ故に廃曲という憂き目に合わねばならなかったと云えよう。時代の激しい流動は狂言の担い手をも大きく変えて行くことになるのである。

佐藤友彦

十月の予告

十月二日 竹韻会 午前九時
しびり 野村又三郎 井上礼之助
蟬丸 杉村 竹翠 西村 欽也

十月八日 梅猶会 午後三時始	野村又三郎 高安 勝久	梅若 修一	佐藤卯三郎	井上 義次	井上松次郎	井上礼之助
十月九日 中部金春会	高安 滋郎	井上 義次	井上松次郎	井上松次郎	井上松次郎	井上松次郎
十月十六日 十周年記念宝生別会	西村 弘敬	西村 欽也	高安 滋郎	井上礼之助	井上松次郎	井上松次郎
十月二十三日 名匠観賞会	福王 輝幸	福王 輝幸	福王 輝幸	福王 輝幸	福王 輝幸	福王 輝幸
十月三十日 青陽会	高安 滋郎	西村 弘敬	西村 弘敬	西村 弘敬	西村 弘敬	西村 弘敬

協会よりの御報せ

山内 郁子氏 囃子披 山田 社中
伊藤 奎子氏 囃子披 山田 社中
加藤丈太郎氏 能 石橋披
高木 博子氏 囃子披 加藤丈社中

登録商標

御千代宝

うすらひ

登録商標

桐 壺

登録商標

室の梅

登録商標

城で餅

登録商標

夏の霜

中区錦三丁目十四ノ五

電話代表 三三三番

(吉川久、英語青年十号)「演劇とこ
とば」(言語生活九月号「能面―増女
(アサヒグラフ、九・一六号)「狂言面
―祖父(おおじ)」(ク、九・三〇号)
「太陽―京都」(十月号)など。いよいよ
よ芸術祭関係の催しに入る。今年も期
待したい。

能や狂言にある不合理性

西村 弘 敬

吾々が日常何気なく語って居る謡曲
や、舞台の上で演じたり見たりする色
々の能や狂言などは兎角節付とか拍子
当りなど、其外型どころ所作などに
まけて、これに氣をとられ其曲の構成
上の合理不合理などはつい氣がつか
ぬ事が多い様に思う。例えば桜川の能
で云えば、子供を失いて狂い出でたる
母親が、はるばるの旅をして漸く子に
めぐり逢いたるのに「いづれわが子な
るらん」などと探しまわるなどはどう
した事であろう。之れが十年も十五年
も別れて居たものならば見忘れ見違
いなども尤と思えるが、僅かの間はな
れて居ただけで、もはや探さねば判ら
ぬ様になったとは少々不自然の様なつ
り方に思える。

又此頃当地で大曲木賊(とくさ)の
能が上演せられて珍しかった、此曲
は何分にも大曲で遠いものとして日常し
げしげ語られる事もなく、能として見
る機会も少なく一向に曲柄なども氣に
留めないものであるが、少々考えて見る
と色々の不合理の点のあるのに氣がつ
く、先づ此曲の大筋は子供が旅の人に

誘拐せられ連れ去られ、跡に残った年
老いた父が気が狂う程に悲歎にくれて
居た処、或る時木賊を刈りに行った帰
り途に旅の僧に逢い、これを我が家に
伴い帰って一泊せしめ、色々子供を失
った悲しみを物語って酒宴などして居
た所、其僧の連れて居た小僧が失った
子供である事が判かり、再会の喜びを
したというのが本筋であるので、此曲
の木賊という題名は木賊の草其の物と
は直接に関係はないので、此の題名が
少々おかしい様に思える。
次に此曲のシテの老人は相当年老いた
老人らしいのに、子供はまだ若く年
令の開きが余り大きすぎる様な感じが
あり、此の点にも幾分不自然を感じさ
せる。
先に指摘した事がある彼の井筒の謡の
業平の高安通いなどは、到底出来得な
いの現実にあった事の様に思われ
て居るのも一つの不合理と思える、其
の外、卒都婆小町、関寺小町、鸚鵡小
町、松垣、姨捨、などのシテの老女は
何れも百才近い老体で、足の運びもと
ぼとぼと橋掛の中途で休息する事さえ
ある程の老女であるのに、其扮装は髪
は姥髪という胡麻塩かつらをつけ、見
た目には左程の老体とも見えないのも
一つの不合理の様に感ずる次第であ
る、またまた能にも狂言にも実際に有
り得ない事などが造られて居る事もあ
って、不合理不自然の点は随分沢山あ
る様に思われるが、然しながら昔から
之れで一応通って(とおって)来て居
るので今更事新しく詮議だてするに
は当たらないが、一寸思いついたまゝ述
べて見ました。

十一月の予告

十一月三日	和泉会	唯子会	十一月六日	九阜会	植村真太郎	高安	滋郎
十一月十三日	淡交会	井上礼之助	十一月十九日	名大宝生流能楽大会	井上松次郎	西村	欽也
十一月二十日	観世会	大槻秀夫	十一月二十三日	観世左近追善能	井上礼之助	西村	弘敬
十一月二十七日	柳水会	井上松次郎	十一月三十日	観世元昭	井上松次郎	西村	弘敬
十二月三日	幸友会	唯子会	十二月六日	九阜会	植村真太郎	高安	滋郎
十二月十日	観世会	大槻秀夫	十二月十三日	淡交会	井上礼之助	西村	弘敬
十二月十七日	柳水会	井上松次郎	十二月二十日	観世会	大槻秀夫	西村	弘敬
十二月二十四日	観世会	大槻秀夫	十二月二十七日	柳水会	井上松次郎	西村	弘敬
十二月三十一日	観世会	大槻秀夫	一月三日	幸友会	唯子会	西村	弘敬



花 甚

本社 中区新栄町 4
 東新町電停東 CBC放送局西隣
 TEL (25) 0471 代表

直売店 駅前豊田ビル一階 TEL (551) 4587
 名古屋駅表玄関 TEL (551) 9078
 駅前名古屋ビル TEL (561) 5760
 温室 千種区猪高町西一社 TEL (701) 0025

狂言

狂言人語

秋風冷やかに渡って菊花爛満、芸術の秋を迎えて演能華やかに展開されます此頃となりました
 二日の和泉会を始とし一ヶ月に九回の演能は正に芸術の秋にふさわしい催能と云われましよう
 先般古川久先生より「吾妻狂言」に就いての貴重な資料、論文を御贈与頂きました、此紙上を借りて厚く御礼申上げます

十一月の催能

十一月二日	和泉会	囃子会	高安	滋郎
十一月三日	幸友会	囃子会	高安	滋郎
十一月六日	九阜会	囃子会	高安	滋郎
能	景観清	植村真太郎	高安	滋郎
能	巻	後藤 鈴子	西村	欽也
能	通小町	観世 喜之	西村	弘敬
能	狂文 荷	井上松次郎	佐藤	秀雄
能	十一月十三日	淡交会	高安	滋郎
能	能 弓八幡	岡田 頼充	高安	滋郎
能	弱法師	井上礼之助	西村	欽也
能	狂柿山伏	佐藤 友彦	西村	欽也
能	十一月十九日	名大宝生流能楽大会	井上松次郎	
於	中小企業センター			

昭和41年11月1日発行
 発行所
 名古屋市中区東門前町6-2
 井上重兵衛方 取(321) 1430
 名古屋狂言同好会
 印刷所
 有限会社安井印刷所 電(541) 4881

能	舟弁慶	山内 一備	高安	滋郎
能	狂文 荷	伊奈 俊美	吉田	耕藏
能	花 月	大槻 秀夫	西村	弘敬
能	野 宮	観世 寿夫	高安	滋郎
能	阿 漕	佐藤 秀雄	西村	欽也
能	狂 盗人	野村又三郎	井上礼之助	
能	十一月二十三日	観世左近追善能	井上礼之助	
能	安 宅	観世 元昭	森	茂好
能	大原御幸	観世 元正	高安	滋郎
能	融	河村 丘造	森	茂好
能	狂 宗	和泉 保之	野村又三郎	
能	十一月二十六日	一謡会 囃子会	井上礼之助	
能	班 女	服部 紗枝	高安	滋郎
能	狂 鬼	瓦 佐藤卯三郎	井上礼之助	

狂言解説

文荷例の方へ文の使いにやられた二人の冠者、あまりに重いのでどう／＼開けてしまいました。重いも道理、中には……
 柿山伏通りがかりに柿を失敬せんと

狂言点心

野村 広二

した山伏、柿主に発見され、散々犬だの猿だのとなぶられた挙く、到々驚に喩えられて木の上から飛ばざるを得なくなってしまう。
 蜘蛛盗人連歌好きの男、生活に困って忍び入った家で見とがめられ蜘蛛の巣にかゝる「蜘蛛の巣にかゝるやさしき盗人」とよみかけられて「きるに切られぬさゝがにの糸」とつけたが……
 宗八川出家と料理人を雇入れるとの話で料理人くずれの俄出家と、出家くずれの料理人が雇われる お経と魚の料理でさあ化の皮がはがれかけ互に交替して処理しようとするが……

十月十日、もずの声をきく。二十日山茶花の蕾がひらく。庭の菊はまだ固い。十月のはじめ、岐阜県のT市へ、東京E女史のおともてまいる。鶴沼からさき、進むにつれて、両側の山の肌色が、雨模様と杉と松の立木のカタチから、深い緑にみえてきびしい。T市はどこへいっても、広くない道や軒下に咲くサルビヤの紅が目にしみる。
 小高い丘の民芸館でみた家々のたゞずまいから、自然のたくましさに打ち向う人間の生活のもろさとよわさとはかなさが汲みとられるが、そういう人間生活を支える強さは、人間の心、よわいはずの心だづくづくおもえた。
 T市の町中にもどって、とある家の奥深い一室に入る。静かなことはいよいよがけない。この静けさに人間のこころは負けてしまう位である。しかもT市の人たちは、この静けさとわずかな動き―古風と新しさを、とりわけ古風

「天正狂言本」拾い書き

廢曲となつた狂言の於母影

佐藤 友彦

「木のへ殿の申ぢやう」というあまりにも有名な幻の狂言の名が見える。暴政に悩む農民が支配者たる近衛殿(この名から多分に古代荘園制支配の貴族階級かと思われる)に目安状を奉りこれを非難し擲するものであり、祭文の状に左衛門尉をかけ合せている。この左衛門尉は臣政に悩む農民の代表であり、この名からもうかがわれる様に土着の名主階級であるのだろう。この「近衛殿の申状」と前述の「湯立」との間には何と大きな姿勢のひら

さを楽しんでいるようだ。ちょうど能や狂言が直面するとおなじ問題にぶつかったとおもった。E女史からは都市と教育、文化の矛盾について有益な話をうけたまわった。演能では、「松風」(シテ観世喜之、ワキ久保田巨)「融」(シテ梅若六郎、ワキ福玉輝幸)、狂言「三人片輪」(茂山千作・千五郎・正義)。放送は、「藤戸」(松本謙三・森茂好)「野宮」(豊嶋弥左エ門)「遊行柳」(金春信高、野村保ほか)「教養特集、日本と西歐」(J・P・サントル、白井浩司、加藤周一、前半能の話いづれもNHK)。展覧会は、「空蟬」(新井勝利、院展)「能」(土焼人形、小島与一、日本伝統工芸展)。本では、「川柳日本文学史」(謡曲、比企蟬人、国文学九月号)「奥の細道」(大竹新助保育社カラーブックス)など。
 十一月は名古屋和泉会。そして年末を迎える。

きがあることであろう。この両者の間には狂言の歴史的展開の一つの可能性があったとするのは間違いないであろうか。

今日百姓狂言として分類される物が数多く残っている。これらはかつて本紙上「三人立て狂言」の項で述べた通り単純、素朴で露骨な「おかしさ」はうかざい得べくもない。それが今日多数残り得たのは何を示すのであろうか。一つには江戸期に入り、完全に支配者たる武家階級に能と共に従属させられた狂言が、何のさしきわりもなくただ単純素朴、平和な祝言性の故に残り得た、そしてこの動きは逆に露骨な農民の反抗を表した「近衛殿の申状」を抹殺することになった。今一つは、これは私の自論となるがそれは、こうした百姓狂言こそ狂言本来の姿をより強く反映させているのではないかと考へるのである。

狂言成立の舞台に少し立ち入って見よう。中世室町初期の京畿地方の農村は、郷村制の形成期にあった。この郷村制という言葉は一般には近世幕藩体制下に於ける地方行政単位としての農村制度をさすのであるが、その萌芽の形成という意味である。永く古代的な荘園制の下にあった農民がその枠を打破り、又荘園とは、別の次元で次第に村落の結合をなしつつあったものである。その結合には種々の形態があるが例えば寺院に於ける「惣寺」の組織、念仏結衆、その他、村人達は次第に旧態然とした荘園の支配者に対して結束を全する地点において固めつ、あったことは十分に考へられる。その中で狂言の実際的な舞台として、私は「宮座」をより重視してみたいのである。村民の集いの場として村堂もあったが

さらに全村民挙げての結集の場としては鎮守の社と祭祀、その集いが大きな意味を持つ。社における集いの座席が「宮座」である。

即ち「宮座」は農村の農耕を中心とした祭神をまつる祭祀と、そこで行われる芸能を持つている。天候まかせの農村では常に神こそがその伝統的支配者であった。その芸能は神の心を慰め(奉納)今日の平和を喜びを込めて報告、感謝し、併せて明日の村内安全、豊作を祈るものであった。ここに「翁」の持つ伝統があるのである。かつて岐阜県の農村で祭祀に見た古式豊かな猿樂に於ても「翁」の舞がいくさ終る毎に後見らしき者が正先へ出て「これは〇〇村何某誰兵衛殿の御祈禱の翁」と告げるものであったが、この時代の芸能としては、うなづけるものであった。今日でも地方の農村、中小都市で時々、意外な程の神社に能舞台らしきものにお目にかかる事が多い。地方に残る田楽申楽も大抵はこの神社の祭祀に奉納という形式で受けがれてきているのである。それらはあくまで神を慰めるものであり、農民の喜びを表現し、神に報告するものであった。つまり、宮座で継承、発展されつつあった芸能は神を対象とするものであって従ってそこには諷刺とか、人を笑せるための芸というものはその限りでは、生まれるはずのなかったものと云えよう。

十二月の予告

十二月四日 乱 能
 吉野天人 寛 敏一
 小袖曾我 山本敬一郎 孝

舟舟慶 河村総一郎
 紅葉狩 助川 竜夫
 狸々 佐藤 秀雄
 羽衣 鬼頭 季信
 葵上 田鍋敬太郎
 蛸山伏 高安 滋郎
 引括 戸田 秀雄

十二月十一日 宝生定式能
 源氏供養 倉本 雅
 河津 野口 緑久
 井上松次郎

十二月十一日 岡崎隨念寺
 飛越 佐藤卯三郎
 井上礼之助

十二月十五日 学生鑑賞能
 伯母ヶ酒 佐藤 友彦
 舟舟慶 金春 欣三
 金春 信高

十二月十六日 学生鑑賞能
 千鳥 野村又三郎
 雁磯 井上松次郎
 羽衣 豊島三千春

佐藤卯三郎
 井上礼之助
 佐藤卯三郎
 井上礼之助
 高安 滋郎

吉出 定男
 藤出六郎兵衛
 西村 弘敬也
 佐藤 太俊
 吉田 俊彦
 鈴木 義久
 鬼頭 嘉男
 竹腰 勝一

協会よりの御報せ

近藤 三藏氏 能声刈披 竹内社中
 奥瀬 よね氏 囃子披 竹内社中
 内田キヨカ氏 囃子披 竹内社中

十二月号は例年通り休刊します

創業天保十二年
 石古屋・信馬町

何と云っても
 ますはん
 お茶は升半

■栄町店 地下鉄栄地下街 ■駅前店 大名古屋ビル地下街 ■売店 松坂屋(地階)名店街